

一、或書ニ伊丹鬼貫一名佛見、はじめハ維舟門人、中頃梅翁を友とし、後伊丹風の一家となせしハ翁也。折ふしの話ニ、さいつ頃筆とらせし桃青おのこ、其質さかしも覺えざりしが、いつし歎諧々にいちじるしく振廻歩行よなど蔑視せしよし。その餘の作者ハ論ずるにも足ざる趣にて有しと也。著述も數々成中、ひとり言・禁足旅記、世ニ知らる。鈴鹿の峠にて狂歌、

鬼貫がすゝかの山に來たればや霧にくもりて見えぬ湖

といふ嘯山の文に従つた項も出る。この種の記事には信を措き難きこと繰り返す要が無いが、然し謬説の流布には一役買つたものと評せざるを得ない。又別の字餘りの例には「月花を見かへすやとしの峠より」をも引いてあるが、「月の月」冒頭の追悼歌仙發句が

亡人の句に、「月花を見返すや年の峠より」と聞えしを今爰に弔ひて

見返さぬ臺を花 歎 秋の月 素 能

だつたことと併せ見る時、特に聞えた句ではあつたらしいが、字餘りの句としてといふやうな狭い見地からでなかつたこと附記する迄もない。

鬼貫の誠説

一

鬼貫誠説の全貌について知るためには「獨言」を讀むに越したことは無いが、それだけに本書が刊行せられた享保三年（鬼貫五十八歳）の頃には従前から抱いてゐた誠説が十全の展開を遂げ得たことを物語るのである。ところで今は日本文藝全體といふ廣い視野からの考察は別として、鬼貫に於けるうちなる成長の跡を辿つてみる、この誠説は享保三年に至つて漸く萌芽し、一時に爛漫と咲き匂ふやうになつたのではない。貞享二年（鬼貫二十五歳）の春に誠の他に俳諧無しと大悟してからこのかた、連綿として持續せられ終始陶冶を加へられて來た。更に溯つてはこれ迄の俳諧が狂句や作意を専らとしてゐたのに對する疑惑を覺え苦惱するやうになつたと自ら告白する延寶九年（天和元年、鬼貫二十一歳）、否延寶八年（鬼貫二十歳）の「慧能録」頃のこととも一應考慮しておく必要があるかもしれないほどで、淵源は遠く決して一時に唐

突に現れ初めたのではなかつた。かやうに大悟到達以前のことには注意しようとするのは鬼貫が「猶深き奥もやあらんと延寶九年の比より骨髄にとりて物ミな心にそむ事なく、やゝ五とせを経て貞享二年の春、まとの外に俳諧なしとおもひもうけ」たと「獨言」(第五十一)に述べたのにもよるけれども、また一方では修行後まだ日も淺く！といつて八歳の時から初めたとしても延寶九年迄には十三年もたつてゐるが、のみならず年齒僅に二十五歳位であるに拘らず大悟について云々するのは若過ぎるではないかといふ意見が出るに違ひないと慮るからだ。早熟兒、確かに鬼貫はかう呼ばれた例さへ無いのではない。さうして斯く評する人は芭蕉の刻苦精勵と老熟とに非常に大きな尊敬の念を捧げたことだらうが、率然としてあの「獨言」の條を讀過するならばこの結論に導かれることも十分あり得るだらう。然し果して鬼貫を早熟兒と見るのが正しいことであらうか。鬼貫が大悟を自ら記念するために編んだ集は「大悟物狂」と名づけられたが、本集は貞享四年(鬼貫二十七歳)當時の作と主張とが中心になつてゐる。刊行は元祿三年(鬼貫卅歳)迄延期せられた。鬼貫はこの間の年時をば決して空費せず一層の彫琢を加へた筈で、特に跋文に示された主張はさうだつたらう。がそれにも拘らず本跋文には誠説としての内容ははつきり確認せられるのに一も誠なる語彙を見出すことがで

きないのは如何なる理由によるのか。私見によればこの一點にこそ鬼貫が爾後不斷に努力を續けたことを認め得ると思ふのであつて、「獨言」に至る迄の三十年は浪費せられたのではなかつた。元祿五年(鬼貫三十二歳)の「誹諧高砂子集」に贈つた鬼貫序文には「雪月花のまことなるに戯れ云々」といつて、誠なる語が初めて用ひられた。尤も誠なる語が見えないとはいつても、大悟後の鬼貫が誠説としての内容鍛錬に對して意を用ひなかつたとするのではない。例へば「犬居士」「佛の見」等の集冊を出版したのもすべてその意味を有するものではない。他ならず、鬼貫は誠説の錬熟を熱望したが、この十分なる成長の諸相を知り得るものが「獨言」であり、かういふ經過のどこに早熟兒らしい片鱗を窺ひ得るだらうか。然も鬼貫は「獨言」を以て自己満足を感じ既に我が事成れりと安んじてしまふやうな人ではなかつた。成程「獨言」は行ひ澄ました禪僧の如き筆致で縷々と精細に且つ淡々として誠説が説かれ、實に本書全體は誠の書と呼ばれるのに相應はしかつたけれども、鬼貫はこれで十二分の展開を成し得たとはしなかつた。第三者は或いはそのやうに思ふかもしれぬが、鬼貫自身ではもう一層の成育を願はないではをられなかつた。その證據には享保十二年(鬼貫六十七歳)「佛見七車」の序では「乳ぶさ握るわらへの、花に笑ミ、月にむかひて指さすこそ天性のまことにハ

あらめかし。いやしくも智恵といふ物出て、そのあしたをまち、その夕べをたのしとするより、偽のはしとハなれるなるべし」といつて、特に幼童純眞の境に「天性のまこと」を見出し、智恵がこれを損ねるとした。智恵程悪い物は無いといつたのはこれよりも前だったが、そこでは特に幼童との關聯のもとに説かれたのではなかつたし、又偽が誠に反するとして斥けられたことも『獨言』によつて詳しく知られるが、その場合でも幼兒に對する言及を含んではゐなかつた。ところが本序文では冒頭から既にこの言が出るのであつて鬼貫の解説が更に進展して來たことを示す。「來い／＼といへど螢が飛んで行く」といふ句が八歳の時の吟だつたことを述べるのは實にこれに續く文の中に出て來るが、單に懷舊の意味ばかりで記されたのではなかつた。固より斯かる老年に達して往時を懐しんだのには違ひないが、唯單に懐しんだのではなくてさうした幼兒の頃が如何に純一だつたかを省みる言葉だつた所に意義深いものがある。又本序文で俳諧の修行は息を引きとるその期迄續けられなくてはならぬと自己の牢固たる決意を語り、初心・上手・名人の別をも考へて「夫俳諧の道に入事、初心を離れて上手にいたり、上手をはなるゝ所名人ならん。上手とハ句を面白く作るをいふ。名人とハさのミおもしろき聞えもなく、底ふかく匂ひあるをいへり。猶其奥にいたりてハ色も

香もなきをこそ得たる所とハいふなるべしや。」ともいふ。この修行に於ける三段階は連歌や能樂の方でも説かれるが、『獨言』では「むかしハ人の心すなをにして、初中後を経しかど、今ハその修行する人だにすくなく、心皆さきにはしりて、いつしか人もゆるさぬ上手にハなりけらし」(第一)とも「修行の道に限りあらざれば至りて止まる奥もあらじ。只臨終の夕までの修行と知べし。たとへば宗祇法師ハ連哥の達人にて餘にならべる人もなしとハいへど、祇公ひとりの上にハ今五とせむ給ハ、五年の功、十とせながらへたまハ、十年の功も有つべき事にこそ」(第十)ともいふのと同主旨で、鬼貫が初心から上手に、上手から名人に、更に進んでは名人以上の無色無香の域を衷心から庶幾し向上の一路を歩いて行つたことを明かにする。かうした三段階を考へることは、悪くすると他人を初心・上手とし自分を名人として高ぶるが如き口吻を伴はないでもなからうが、鬼貫にとつて大切なのは自己でこそあれ他人ではないから毫も氣障なものではなかつた。自意を樂しむことを以て第一とし、「俳諧ハミづから述べて自ら心をよろこばしむ」(『佛見七車』所收「愚者」といふ題の文)るその達人になるべく専念した鬼貫が、自らの境を回顧反省し修行稽古を積んで行かうとした決意を語る言葉のどこに芭蕉に比肩するだけの陶冶鍛錬への意欲を缺いたといへる點があらうか。私をして忌憚無く言は

しむるならば、鬼貫・芭蕉の比較に於ては餘りにも成心があり過ぎるのでないかと思ふが、同じことは鬼貫の誠と芭蕉の風雅の誠とを考へる際にも指摘できるだらう。本書ではこれ迄にも屢々兩者の對照に言ひ及んで來たから、この稿でも中心をその點に置いて述べて行きたいと思ふ。

さて鬼貫の誠説については色々な見解が提出せられてをるが、その倫理的な一面のみに注目してあげつらふが如き説も案外に有力なやうだ。但し等しく倫理的な面に注目するとはいつても、これには細別すると兩様の立場があつて(イ)文藝論(鬼貫にとつては俳諧)的の面が倫理的な面により不當に壓迫せられ、従つて文藝論としての十分なる展開を完遂し得ないで終つたといふ憾みが大きいとする者と、(ロ)一にも誠二にも誠と説く鬼貫の立場に大いに共鳴し、鬼貫誠説の有する兩面的な含蓄滋味の豊かさを味はひながらこれに傾聴するといふ落著きを缺き、ただ隨喜する者があるやうだ。いふ迄も無く、鬼貫誠説に對する諸見解が盡くこの二つの中の何れかに分類できるといふのではないが、今その中の顯著な者を紹介してみると右のやうな所論を有する人もかなり多いのである。而して(イ)に於ては果して誠説を文藝論として聽かうとする謙虛さが認められるかどうか疑はしく、その慌しくも早急な態

度には多くを期待し得ない。(ロ)に於ても同様で、文藝論として耳を傾けようとするのかそれとも倫理説として聽いてゐるのか甚だしくはつきりしない憾みがある。一言にいふならば、誠説が文藝論としての一面を有すると同時に他方では倫理的な言及をも含むがために、その兩面に對する顧慮が十分に拂はれなかつたのに起因する濁濁が右の諸説には認められるのである。勿論この濁濁は鬼貫の誠説に對する諸解釋の中に存するだけで、鬼貫の誠説そのものの關知する所ではないのである。さうして(ロ)が(イ)に比して一見遙かに鬼貫をよく知る者の言であるかに映ずるかもしれないが、その至らなさを加減には甲乙の差は全く無いわけで與し難い點は同じである。ではこれらの弊を除くために採られるべき方法は如何にあればよいか。そのためには鬼貫誠説の兩面、即ち日常生活に於ける規範としての誠と、同時に文藝論乃至は俳論としての誠との別を考へ、然る後に初めて兩者の渾融關係を検討するといふ徑路を踏まなくてはなるまい。

二

鬼貫誠説について述べる際に中心資料となるのは「獨言」に他ならぬが、同書にはこの種

の論及が多い。その中で誠なる語が用ひられ従つて誠についての説明がなされたと明かに知り得る箇所が二十三ある。この数は上巻だけに限つた際のことだが、下巻にも「つゝ藤山吹、其外名をもてる物、古哥にすぎり、古き詞にもたれて、只おもしろしとのミ大かた上にてながむる人おほし。底より詠る人我心われに道しるべして、まことのおもしろき所に入べし」(第七十九)なる條が出る。若しこれを加へれば二十四箇所となるわけだが、強ひて誠説の解説と見る要も無いやうで、今二十三箇所として置かう。この中で日常生活で遵守せられるべき人倫として説かれた條及びその傾向の強い條は六箇所、全體の四分の一を占める。以下實例に互つて紹介してみよう。

一、大かたの人ハ口にまかせていひつゝくるをこの道の達者なり、と心得て、更に我に益ある事をしらず、俳諧ハ只まゝにとづく中立なり、と心をよせて修行すべし。たとへばわかき人の親にいたくいさめられん時、腹だゝしきころの出る事あらば、親といふ前句に子として腹立る鉢を付句に取なほして見侍るべし。全くのりなじみはあらじ。又打杖のよきをかなしめる心ならば、よくなじむべし。さあれバ親にむかひて蜂吹(註、腹立つ)ハ神慮にもにくませ給ふ所なり、とおそれて、孝心にもとつき、あるは人につかふる身の

慰むかたにいざなはれて、用をうしろになす心をも付句に取なをして、それを改め、或ハ他人のまじはりだに四海ミな兄弟なり、と心のあゆみをつけ、常のわざを俳諧になぞらへ、はいかいを又つねのむつまじ事に案じよらば、自然と句毎にのりなじみも出来ぬべし。(第二)

これは俳諧特にその附句の心得が世用と等しき所以を述べたのである。かういふ言葉に接する時に人は俳諧の附句としてあるべき相を説明するために單なる譬喩を用ひつつ聞く者の理解し易いやうに、父母・兄弟・四海同胞のことを假り用ひたのだらうとか、或いは本書を與へられた者が俳諧を専門にする人ではなくて歴とした生業に従ふ者だつた點を考慮に入れての説明ではあるまいかと疑ふかもしれぬ。然し前にもいつたやうに世用を離れた俳諧などを鬼貫は想定することができなかつた。だから眞實鬼貫は斯かる相互連關を認め、俳諧が世道人心に對して裨益することを確信した。そしてこれは俳諧を和歌と同様に教誡の助となることができるのみたのを證するといへよう。芭蕉が「柴門辭」で我が俳諧は夏爐冬扇の如く衆にさかひて用ふる所無しと述べ、無用の用を説いたのは普く知られてゐるが、鬼貫と芭蕉との間には斯くも大きな逕庭が存するのだらうか。然し芭蕉は俳諧を卑しめる人が世にはある

けれども、世事百般盡く俳諧で無いものが無いとか、俳諧は俗語を正すの役目がある（共に『三冊子』）とか説いたほどだから一途に世用との没交渉を誇示したのではない。が正面から鬼貫のいつたやうな具合には述べてはゐない。ところで鬼貫は世用のための俳諧について力説すると同時に、世の人の心構へが俳諧の付句の如く我を捨てるべき必要をも強調したのだから、俳諧を世用のためにのみ存在するとしたのではない。ここに鬼貫が世用を重んずると同様に俳諧を甚だしく崇め道としたことが知られる。否道とすることが直ちに人倫への考慮を含むこととなるのだ。さうして鬼貫が特別に俳諧の附句のことを持ち出して來たのは、既に『大悟物狂』の解説でも述べて置いたやうに、前句と附句とが相互に己を捨てて前句だけでも作れず附句一つのみでも現し得ない諧調を成す所に附味の妙が發揮せられる所以を炯眼にも看破した結果の心憎い言葉だつたが、この相手を愛ほしむ心情の豊けさは、日常の人倫生活に顕現しては敬愛の念に強い日本人の生活態度となる。我が國で連句の如き文藝様式が特異な發展を完成し得たのは和敬を重視し小我を去ることを以て第一義とした國民性の現れであるとは既に屢々説かれ、讀者の耳に熟してゐることだらうが、兩者間の交渉を指摘したのが鬼貫の言だつた。のみならず鬼貫が斯かる言説を吐露する直接的な原因は儼として存在し

た。それは俳諧を目して「當座の化口にして、根もなきいひ捨草」（『獨言』第二）とし、狂句・作意をいふのに過ぎないと輕々しく考へることに對する烈しい反省の言だつたが、鬼貫は遂に「俳諧ハ只まともにとづく中立」とするに至つた。鬼貫は然し世用の事に説き及ぼさないで、例へば

付句ハのりなじミを專一にすべし。宗祇法師の雜談にも、上手の付句ハ他人の中よきがごとし。下手のハ親類の中あしきがごとし、といひたまひけるとぞ。（第六）

宗長法師の雜談に、付句ハ只前句にはなれて、しかもはなれぬやうに有べし。たとへば蓮の莖を引切て見るべし。はなれやすくして、しかもその糸絶る事なし。其どくに打越のがれ、前句の心を捨るハ蓮のくきを切にとならず。扱縁語をひかへ、寄合をわきばさめるハ糸のつききけるがどし、と。俳諧にも又ともに信ずべき事にこそ。（第四十六）

と、附合の心得を教へるに際しては必ずしも人倫關係に引き寄せて説くとは限らないけれども、然し第六の條の如き場合には他人・親類、仲がよい・不仲といふやうな人倫關係の顧慮せられた古人の語を掲出したのは第二條と相似る點だつた。

心すなをに生れつきたる人も、俳諧にてハたゞうそのミいひならひ、かたち實跡なるもお

なじく異形を盡せる人おほし。俳諧といふ物ハいかなる事を益とはなせるぞ、と深く尋ね入なん事もなく、口に出るにまかせていひなくさむわざなり、と只かるく敷おもひとるハ、聊この道を辨へざる故にて侍る。心すなをなる人、俳諧にていふどくにうそつきて世に交るべきや。又風俗こうたう(註、公道、ちみの意)にしなして、世に交る人の衣服に興ざむる程の模様をそめ、或ハまた羽織袴の上に甲か立烏帽子などを着して、人中へ出よ、といはゞ出べきや。能、考するべし。それ俳諧ハ和歌のはしなれば、心を種として萬づのとの葉となり、目に見えぬ鬼神をも哀とおもハせ、猛きものゝふをもなくさむる道とこそ聞しか。俳諧を修して、まどの道を行侍らば、なさけしらぬ人すら情をしり、あるは不孝不忠の人も不の字をとをさくべし。只世に交ハりてさしむく所を前句に立て、ひとつ／＼付句に取なをして考見るべし。前句と付句と肌もあハず、のりなじみのなき時ハ是すなをの道にあらじ、とたしなミ改むべき事にこそ。(第二十七)

これ亦俳諧と人生との調和について顧念した言葉であつて、俳諧のあるべき相を解説するため日常生活を以て譬喩とし理解し易からしめようとしたのではない。俳諧・日常生活の心掛け夫々獨自でありながらも、然も兩者間には自らの連繫を認めた。そこで先づ俳諧のある

べき相についてどう説明したかを見るに、俳諧はうそをつくもの異形を盡すものと考へ誤る人の多いことを指摘した。これは俳諧は單に滑稽だとし、唯ひたすらにをかしがればいいとして人道を蔑し、古の事柄も人も歌等もすべて諧謔の料にするだけで安んじ、寓言論乃至狂言論のみに執してゐた談林の弊について記し、更には俳諧は火をも水にいひなすもの・上手にうそを吐くものとしてゐた通念に對する抗議でもある。尤も俳諧をかう見てゐたからといつて生活態度迄が不真面目で眞剣を缺きはしなかつたらうが、鬼貫によれば、ではその生活態度に即したすなほな性質が同時に俳諧の上にも現れ一枚とならねばならぬとしたのである。異形に關しては「いにしへ談林風・伊丹風などいひて、句にさま／＼異形をつくせし時節も云々」(第五十四)とあつて、長發句の如き形式方面のことは當然含むが、そればかりではなく内容や思想についてもいふ廣義のやうで、これを總括して談林風・伊丹風の弱點とした。ところで従前このやうに安易に解せられた俳諧に對して眞摯な反省が加へられた結果、鬼貫は俳諧も亦和歌の一體なること、その和歌は古今和歌集の序文にいふやうに「力をも入れずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、男女の中をも和らげ、猛き武士の心をも慰むる」神妙の力を有する道であつた。さうとすれば、俳諧とても同様に道に迄

昂揚せられぬとした。ここには從來俳諧を軽く見てゐたのに反して、和歌に伍し得るだけの資格ありと非常に重く見る眞率な態度を認めることができる。又單に重く見たといふに止まらず、俳諧文藝に於ける不易の道を見出したともいひ得る。古今集の序文が和歌のあべき相を的確に述べた歌論として濰據せられることは久しかつたが、俳諧の方では先づこれに對するもぢり即ち詞のをかしを以て和歌への歸一といふ大業の第一歩を開始したが、芭蕉とても暫時その名残を示した後に心の上での歸一を成し得た。鬼貫も亦この芭蕉と歩みを異にしたのではなかつた。

他方日常生活について見ると、たとひ俳諧はうそをつくものとしても日常生活に於ては果してうそを以て交際することができるだらうか。又平常質素な服装をし實直な生活を營む者が不調和にも興の醒めるやうなけばしい模様入りの衣服を著たり、又は羽織袴の上に甲冑・立烏帽子を被るといふ不均齊を敢へて行ふだらうか、よく考へてみるがいい。何故なら内なる精神と外なる形式とは一致するのが本來で、内が質朴ならば外に現れても質朴、この反對も同様といふやうに内外相呼應するものだ。俳諧の方で見ると、内なる心と外なる詞とは相叶ふべきで、若しも詞のみに泥んで一向にそののをかしを願ふならば心を疎略にするこ

ととなり、どこに心詞の一致が認められよう。又どうして俳諧の益があらう。斯くして鬼貫に従へば、心詞の中では別して心が重んぜられるべきだといふ結論に導かれないではゐないが、鬼貫は日常生活に於ける心構へを内、俳諧を外なる顯現としたとも解せられ、ここに外なるものが徒に内なるものと相剋するのみか前者が後者を不當に壓迫することに對し憂慮に耐へず、そのために鬼貫は兩者の渾融を最も重要視し、俳諧修行の結果は情知らぬ者すら情を知り、不忠不孝の者と雖も不の字を除くことができるやうに誠の生活を目指して進まなくてはならぬとした。そして世間との交りに於てもこれを前句と考へ、これに應待する我が態度を附句と見て、前句附句の調和が大事である如く、他人と我との間について絶えず三省しなければならぬとした。

つよき句・よき句の事、大かたの人ハ俳言がちにいひて、句のかたちいかめしく作り、或ハ文字を聲にしていふたぐひをのみ、つよき句なりと覺侍る。心得ちがひなるべき歟。たとへばがさつなる(註、落著き)無きの意)人の喧嘩しける時、其さまさながら勇士に似たれど、底意に死べきまともなく、只人の恐るべき様を作りたれば、死ぬべき場にをよびて遯る事す。みやかなるがごとし。又まどを深くおもひ入て、すがた・詞柔和に仕立たるをよき句な

りといへるも、又心得違ひなるべし。たとへば物とがめしける人に行あひて、我にあやま
りなき事にも、詞をつくしてやほらかにいひける時ハ、よハかりしやうに見え侍れど、や
む事を得ざるになりてハ一足もさらずして死をきハむるがどし。まどすくなかりしをよハ
き句といひ、まどを深くおもひ入なんをつよき句なりとハいふなるべしや。その虚實をも
辨へずして、句のすがた・詞にのミか、ハりて強弱の沙汰しけん人ハ未熟にしてひとへに
あやまりなん事にや侍らん。(第四十二)

これ亦句の強弱は誠の多少深淺によるもので、俳言がちにいつたり、句の形をいかめしく作
つたり漢語を用ひたりすることが即ち強い句の必要條件だと考へ、反對に詞・姿の柔和なの
を弱い句とするが如き形式中心の態度を排除せんとする。何故なら鬼貫にとつて大切なのは
用語や姿の如何にはなくて一に心に存したからで、その關係はちやうど外形的には虚勢を張
り勇者らしく振舞ひつつも一大事に際會するや忽ちに逃亡する賈せ勇士と、外見上は如何に
も穏和に見えて然も止むを得ざるに至るや死を決して戦ふ者に眞の勇士らしい面目が認めら
れるのと同様だといふ。従つて本條には俳諧に於ける心と詞・姿とに對する見解と同時に、
處世の心掛けにも説き及んでゐることになるが、心・詞(姿)の問題に關しては別に述べる豫

定なので今はもう少し俳諧が我に益ある事(第二)。「俳諧といふ物ハいかなる事を益とはな
せるぞ」(第二十七)といふやうな俳諧の效用方面について記した條を見て置きたい。

我ハ俳諧を仕習ひてよりいくとせを重ねたり、と指をかぞへて、それをのミ修行なりとお
もへる人ハ心得違ひも侍らん。まどの道にこゝろをよせずして、句のうへをのミいひもて
あそびたる作者ハ、たとひいくとせをふるとも身の益とはならずや侍らん。(第三十七)

「句をのミいひもてあそぶ」が専ら詞・姿の逸興のみを喜ぶ徒を指すことはいふ迄もなから
うが、これでは身に益を齎し得まいとする。のみならず斯かる修行は如何程續けられたとこ
ろで眞の修行と呼ぶに足らず身の益ともなり得ない。修行の重んずべき所以については鬼貫
も力説し、數奇(第九)と共に絶大に尊んだけれども、修行の名に價するためには必ず誠が籠
つてゐねばならず、その點では俳諧と日常生活との間には何らの差別も無い。

俳諧の修行といへるハ、ひたすら句にまどの味ひを稽古して、平生人に交るをもすぐにそ
のまどを用ひていつはりなき事をむねと心得たらんをこそいふべけれ。

とは上述して來た相即不可離の聯關を要約した言とみられよう。では斯くも誠が絶対視せら
れるのは何によるかといふに、誠があつて初めて神慮佛道に叶ふことができるのである。

るといへよう。

祈禱の俳諧興行していひつらぬる所、句にいつはりおほきハいかでか神慮にかなふべき。句毎にまどを辨へざる人の努／＼おもひ立べき事にあらず。もたいなきわざにぞ侍る。御影のかゝりたる座に着てハ各其日の神主なりと心を改め、又御影のかゝらざる席には心のうちに勸請申て在がどくつしむ人ハいつはりなき句も出来ぬべしや。(第十七)

神慮に叶はないといふ言は第二項の所でも子として親にさからふ場合にも使つてゐたが、ここでは偽の多い句は神慮を慰め難いとした。御影云々とは俳席に人麿像等を掛ける習はしだつたのを指すが、その時には神主の如き心構へを以てし、さうでない場合も在すが如くしなければならぬとした。鬼貫は正徳年間神道の傳授をも受けたが、ここは必ずしもその事を想起しなくともよく、唯ひたすらに謹しんだ態度を以て臨まなければならぬとしたのであつた。芭蕉も宗房時代に「貝おほひ」を産土神に捧げ、「神樂の發句を巻軸にをきぬるハ、歌にやハらく神心といへば云々」と、同じく古今序に則つた序を物した。但し「貝おほひ」が詞の興を中心にしたことは更めて説く要も無く、神佛への敬虔な真情は「奥の細道」紀行に最も著しく現れた。それはとにかく、この第十七と共に、

追善懐舊の俳諧もまどをはこぼざる時はこれも佛の道にそむき侍らんか。(第十八)

も亦主意に於ては變る所はあるまい。又「獨言」には鬼貫がまだ廿歳にもならぬ頃に維舟・宗因列座の俳席に列なつた時の思ひ出が書き留めてある。即ちその座で「ちよと見にハ近きも遠し吉野山」といふ前句が出たので鬼貫は「腰にふくべをさげてぶらく」と風狂者の節を以て附けた。ところが當時の掟として名所に物を附ける際には確實な出典を持つ古歌か古事かが必要だつた。果して如何なる古歌に因んで詠んだのかと維舟から尋ねられて、鬼貫はぐつと返事に困つてしまつた。正直に典據無しに附けたと答へるのも面目無く感じ當意即妙に作意を以て「みよし野の花の盛をさねとひてひさごたづさへ道たどりゆく」の古歌によつたと答へた。すると更にそれは何に載る歌かと重ねて問はれ、^(註二)萬葉集か夫木抄かで見ることがありますと二度迄もうそをついてしまつた。維舟はそれならばよからうと執筆に清書させただけでも當時鬼貫は冷汗が流れるの思ひをし、後日に及ぶも猶顔の赤らむことだと懺悔してゐる。この話は有名だから原文を引く迄もあるまいが、鬼貫は「いかなれバ師の心をかすめ、かく偽りをもてもたいたなくも懐紙をけがしたる咎、かへす／＼も道にそむきし事今ハたおそろしくぞ侍る。」(第四十八)と、師恩に背いたことや懐紙を汚した點を悔いた。思ふに

ふとした動機で過誤を冒しそれがいつ迄も悔まれるとはいつても、勿論國法に戻るが如き大それたことでもないやうな行爲は私等にしても一つや二つ覺えのあることだらう。鬼貫の例に於ても普通ならば頓智の利く才の閃めきはどうかすると自身でも高く買ひかぶる底のものでもあつたが、鬼貫にとつては斯くの如き態度は好んで俳諧を傷つけ低める行ひとしてしか考へられなかつた。さうして三十年以上もたつて老年に入れば入るだけ益々恥づべきだとする感慨が強まるといふのだが、この例などを見ても鬼貫が誠説で大悟した人に最も相應はしい性格を端的に物語るゆかしい佳話とすべきだらう。斯くして鬼貫の説く誠が素直・忠孝・四海兄弟の親睦感・師恩感謝・つつましき・眞勇・神慮に叶ひ佛道にも背かざるものであつて、うそ・異形・偽り・不忠・不孝・小勇等と相反する意義を有するものであることが明白にせられる。

(註一) 奥義抄。季吟の『誹諧埋木』には八雲御抄に仰せられた誹諧様々の一つ枉言について「火をも水とまけていひなせる也とぞ」と註する。

(註二) 山崎美成の隨筆『好問堂記』卷五(自文政壬午年六月廿日至十二月朔)には「萬葉集むかしハ世人のあまねくも讀ざりしものとぞきし。その故にや、世に萬葉集にありとしもいふ類の本集になきが

いと多かる。先ひとつふたつをいはは、「樂しミハク類棚の下すゞミ」といふ類、「なわしろ水のとぢぐち」などいふ哥なり。これにつゞきてハ、夫木抄もしかにやありけん。「秋なすびわさゝのかすに漬ませて」といふ類など、むかしより夫木抄をのミ引て證すれど、かの抄になし」といひ、次に「おのれこれらの事に付ておもふに」とて、『獨言』の本記事を擧げ「これらも萬葉・夫木にハ世の人のしらぬ歌多きゆへにしか云て坐上をあさむきしなるべし」と結ぶ。芭蕉の「幻住庵記」にも萬葉に出ぬ歌を引いてあるやうに、確にかういふ例は他にも多いらしい。

三

前には鬼貫誠説の中で倫理的傾向の強い各條について概観して來たが、その場合に於ても唯倫理的な言及が多いやうに映ずるだけであつて文藝論的な面が顧みられなかつたのではない。その證據には一見して日常生活について述べられるやうな條の中に如何に心と詞・姿への考慮が拂はれてゐたかを想起すべきである。従つていくら本項で文藝論的方面について考へようとするからといつて、前項との連絡無しには進むことができない。けれども論旨を進めて行く場合に特に文藝論としての誠説に關して考へるのは方法として便宜だといふ理由だけのために、次にはさうした一面を抽出してみよう。さて鬼貫誠説の文藝論的面は心と詞・

姿との問題に始まり、さうして心と詞・姿との問題で終るといへる。一體心と詞・姿との問題は歌學に於て最も重視せられる問題の一つでこれに關して論じた言説は枚舉に遑が無いだらう。ところが俳諧の方でも依然として重要さを減ずることがない。減じないどころか更に益々重要でもある。何故かといふに、俳諧文藝の性格を決定的にするをかしが最初多くは詞中心のものであり、後ちこれが高められ深められて遂に心の方に推移して來たと斷じられるからだ。尤も既に宗祇は吾妻問答中で「誹諧體にも、心の誹諧、詞の誹諧侍るとかや」といひ、徳元もこれに従つて心の俳諧を重く見た（『誹諧初學抄』）が、定家の著と傳へられる桐火桶に「人毎に、唯誹諧とは、狂歌をいふと心得たる許りにて侍る程に、小智の妨にて、至極をしらぬなるべし。凡狂歌げに侍れども、心えかはるふし侍るべし。誹諧と申す體は利口なり。ものを欺きたる心なるべし。心なきものに心をつけ、ものいはぬ物にものをいはせ、利口にしたる姿なるべし」とあるのはその儘土芳の「三冊子」に引用せられて、蕉風以前の俳諧が利口を專一としたとする立論を助けた。この利口が言語的なをかしを意味することはいふ迄も無いが、土芳は續いて「夫俳諧といふ事はじまりて、代々利口のみにたはむれ、先達終に誠をしらず。中頃難波の梅翁、自由をふるひて世上にひろしといへども、中分いかにし

ていまだ詞を以てかしこき名也」（『三冊子』）とて、宗因すら詞のをかしを主としたために至極の妙處を發揮できなかつたと惜しみ、「しかるに亡師芭蕉翁、此ミちに出て三拾餘年、俳諧にて實を得たり。師の俳諧は名ハむかしの名にして昔の俳諧にあらず。誠の俳諧也。」（同）と師翁の俳諧を稱揚した。但し芭蕉は毫も詞の俳諧を認めなかつたのではない。純蕉風樹立以前専ら詞のをかしを喜んだのは固よりだが、樹立後と雖も俳諧の面白みが心以外に詞にも存することを教へ一筋に考へてはいけなとも教へた（同）。然しその力點が心に移行して來たことは争ふべくもなかつた。なほここで一言いひ添へて置くならば、貞徳が俳諧は和歌連歌に用ひない漢語俗語を以てするものと規定したことは周知の如くだが、芭蕉俳諧では斯かる形式的條件をいつ迄も遵奉しなかつた。換言すれば所謂和歌連歌等の睨み方に對峙できる別様の睨み方があると信じたわけで、これが不易流行の中の流行を成し俳諧の新しみを庶幾する念の強さを示した。再び土芳の言を引用すると、「詩歌連俳ハともに風雅也。上三のものにハ餘す所もその餘す處迄俳ハいたらずと云所なし。花に鳴鶯も、餅に糞する椽の先、とまだ正月もおかしきこの頃を見とめ、又、水に住む蛙も、古池に飛込ム水の音といひはなし、艸にあれたる中ハ蛙のはいる響に俳諧をき、付たり。見るに有、聞に有、作者感るや句

と成る所ハ則俳諧の誠也(同)と記すのは、古今序に「大和歌は人の心を種として、よろづの言の葉とぞなれりける。世中にある人、ことわざしげきものなれば、心に思ふ事を、見るもの聞くものにつけて、いひ出だせるなり。花になく鶯、水に棲む蛙の聲を聞けば、生きとし生けるもの、いづれか歌をよまざりける。」とあるのを直接に繼承する。詞は固よりその心に於て古今集を引くいつて和歌を宗とするの傾が極めて顯著だつた。そして實は古今序と『三冊子』のあの一文との對比の中にこそ不易と流行との美しい交錯が発見できるので、不易でもあるが反面では流行をも示す關係に立つてゐる。

他方鬼貫の場合について見るに、彼に唯心的傾向が甚だ強いことは雜の問題・戀の附句の問題、その他鬼貫俳論の第一義をなすものが盡く然ることは既に夫々解説して來た通りだ。それをもう一度想起するよすがとして、例へば「獨言」所載の

戀の詞をさへいへば戀の句なり、とおもひて本情なき句もおほく聞え侍る。詞に戀ハうすく侍るとも、心の深からんこそこのむ所にハ侍れ。……(第五十八)

の一條のみを参照しても直ちに首肯せられるだらう。戀の和歌や附句がどんなに作者の手腕の程を示すかとして注視せられたことを思へば、單に戀といふので眉をひそめるやうな態度

をとらない方がよいが、芭蕉が晩年に附句で極めて斬新な手法を求めようとして最も苦心したのは他でも無く戀だつたといふ(藥師宛杉(風書翰)し、それほどの戀句で鬼貫は唯これ迄戀の詞として約束づけられて來たものに従ふのを潔しとせず、たとひ戀の詞として規定せられなかつたとしても戀の本情を現すに足るものを用ひようと努めたのだ。文藝は文字や詞より成るかたらくら鬼貫でもこれらを全く無視しようとしたのではないが、これらに拘束せられることの至らなさを看破したのである。宗因等にも戀の百韻があり、現に若干傳來はするけれども、鬼貫の異色は右に述べた點にある(後述)。或いは

鶯ハうぐひす、蛙ハかはづと聞ゆるこそをのれ／＼が哥なるべけれ、うぐひすに蛙の聲なく、かはづにうぐひすの啼りなきこそまどにハ侍れ。(第三十三)

と説かれるのを見ても古今集序文との密接な聯關は今更めて斷る迄も無いが、又芭蕉俳論との酷似を看過するわけにはゆかぬ。といふのは、そこに鶯や蛙の本情を見落すまいと努める者のみから聞ける響が籠つてゐるからだ、ちやうど土芳が蕉風の真意を揚言して不易と同時流行への志向を示したやうに、土芳の語にはひたむきに俳諧の新しさたる流行の面のみが強く主張せられるやうだが、彼の主意がそのやうに偏したものでないことは落著いて讀む者には自ら諒得せられる

「鬼貫のこの言葉の中にも蕉風的な不易流行二つながらの意味が認められる。その理解のためには「俳諧ハ連哥を元として連哥を忘るべし、と古人の詞にも見を侍りしか」(第四十二)を強ひて引用する迄もあるまいかと思ふ。斯かる蕉風と鬼貫との比較をすれば際限が無いから、次には「獨言」に於ける心と詞・姿との問題について論じられた諸條を見よう。

ことやうの句を作りて、それを新しとおもふ人ハ、此道を深く尋ね見されば遠きさかひに入がたくや侍らん。詞ハ古きを用ひ心ハ新しきを用ゆところ聞しか。(第三)

この言は心詞の關係に對する鬼貫の見解を最もよく代表するといはねばなるまい。「詞ハ古きを云々」は定家の詠歌大概に「情以新爲先^{求人未詠}」と冒頭する有名な言によつたが(近代秀歌)鬼貫が口を開けば皆句であるとか、平生に話す詞を七十四に切れば悉皆句だとしたのは盡く定家の感化を蒙つて發せられたもので、別の意味を有するのではない。この定家の言は俳諧の方にも屢々引かれるが、蕉風の側では

詞以舊可^レ用、情以新爲^レ先、定家卿はしめしたまひ、山谷は換骨奪胎の法を立たるに、誰かつたえし、「俳諧は平話のあたらしミを本意にしてあながち古人のことばをもちひず」と芭蕉菴の示されしとて、窮巷僻地に傾治の絶言舞妓の荒唐俚語俗詞ならねば俳諧

ならず、と此筋の魔境におちいるもの多し。もとより此道は俗によつて眞趣をたのしむ事なれば、いづれをか是とし、いづれをか非とせん。しかもひたぶる古へのミ拘らば詞はあたらしくと情致はふるびぬべし。(元禄十二年、朱拙撰『けふの昔』)

といふ記事などもあり、必ずしも全的に従はれなかつたやうにも見えるが、反省を求めに足る古人の言として十分注意せられた。但し鬼貫に於ては終生この言を奉じ、左に掲出する諸々の條も皆それに對する解説敷衍だとせられるほどだ。

句を作るに、すがた・詞をのミ工ミにすれまゝとすくなし。只心を深く入て、姿・とばにか、ハラぬこそこのましけれ。古哥にもあれ、古事にもあれ、ひたすら案じ探りて句を作ると、をのづから心にうかぶ所を用ゆるとのさかひならんか。(第七)

新しく作りたる句ハやがてふるくなるべし。只とこしなへに古くもならず、又あたらしくもならぬをこそ能句とハいひ侍るべくや。作意にのミか、ハリていふ句と、まゝを深く案じ入て、一句のすがた・詞にか、ハラぬとの差別なるべし。(第十一)

秀逸の發句といへるハ、打きこゆる所、何とらへておもしろき事も見えず。只詞すなをにたけ高くして、其意味口をして述る事かたきをこそいひ侍れ。是ハ常に詞に巧ミよせたる

句をのミ面白き事に覺て、もてあそぶ人の耳には聊かよふべからず。……(第三十一)
……只まどを深くおもひ入て、句のすがたハ其時のうまれ次第とあきらめたらん人の句ハ
すがたかならず一様ならず。獨吟の俳諧などハ所々自然と心かはりて、見るに飽事あら
じ。(第三十二)

尤も心を重んずるからといつて、詞・姿を忽緒に附したのではない。それどころか、心と詞・
姿との相應するところに最上の到達點を認めた。即ち

發句ハ月雪花木と仰々、其外生る物のたぐひ、すべて何にてもあれ、ひとつ／＼に物いは
せたらんに、かくまでも我事をいひをよぼしぬる事かな、と深くよろこびなん心・詞にあ
らざればまどとすくなくや侍らん。(第三)

まどを深くおもひ入て言のべたるも、詞よろしからざるはほいなくぞ侍る。心と詞とよく
應じたらん句をこそこのむ所にハ侍らめ。(第四十四)

鬼貫が斯くも詞に對する警戒を怠らなかつたのは、詞には偽が生じ易く且つそのために心の
域に達することができないといふ危険を熟知してゐたからだらう。思ふに、鬼貫が大悟と呼
ぶものの實體は詞・姿から離れて心に就くべきことを知つたのを指すのだらう、いひ換へる

と詞のをかしを脱して心のをかしの重んずべき所以を悟得したところに存するだらう。鬼貫
は古の名歌と呼ばれるものが詞の巧み・姿の虚飾を超えてあることを悟り俳諧のあるべき相
について想到し得た。「誠の外に俳諧無し」はそれだけに痛切にも聞えるが、ここに誠とい
つたのは「獨言」時代の語彙によつて記し著けられたからであり、貞享二年の頃には未だ誠
なる含蓄深い語彙そのものを用ひたのではあるまい。勿論大悟の内容は誠と呼ばれて初めて
安定を得るけれども、當時の鬼貫にはまだ誠の語を以て縦横に説き來り説き去る程の徹底し
た大観は獲得できず、ただよき歌がさしたる詞・姿の彩によらずして然も深い心を湛へ得た
祕密に觸れ愕然として眼を開いたことだらう。この一點に於て蕉風と通ずることは土芳の言
や、さては他門の俳諧は彩色繪の如し、我が蕉風俳諧は薄墨繪の如し(「桃の杖」等)といつ
た許六の言に匹敵し得るに違ひないが、鬼貫は詞・姿の範圍を抜け切れないところの巧みを
指して狂句とも作意とも呼んだ。この場合の狂句は多くは利口を意味するが、作意について
は第十一・第十五・第四十八等に繰返し述べてある。例へば、

作意をいひ立たる句ハ、心なき人の耳にもおもしろしとやおぼえ侍らん。又おもしろきハ
句のやまひなりとぞ。修し得たる人の幽玄の句ハ、修行なき人の耳にはおぼろげにもかよ

ふ事かたかるべし。しかもその詞やすければ、いはゞ誰もいふべき所なりとやおもひ侍らん。(第十五)

といひ、又豫め拵へて置いて俳席で無理に附けようとするのを難し自然でないと批評する(第三十)。このやうに作意を輕んずるからこそ同じ誠でも作られたものが存することを述べてこれを斥けようとした。

いつはりを除いてまどをのミいひのべんとちからを入れて案じ侍るハ、いつハりいふにはまさりたれど、これも又まどを作りたる細工の句にて侍り。此道を修し得たらん人の虚實のふたつに力を入らずして、いひ出す所、句毎にいつハりなきをこそをのづからのまどハいひ侍るべけれ。是なん常の心に偽りなく、世のあはれをも深くおもひ入たる故なるべし。

(第十三)

ここ迄来ると、俳諧も既に文字の技を超え日常の修行や人格如何の點に進んで来ようし、強靱なる意志力を持續して来た達人によつて初めて成されるものだと考へた。實に俳諧は入り易くして到り難く、道として仰がれねばならぬものであつた。

聞えぬといふ句に、幽玄と不首尾の差別侍り。まどを辨へぬ人のさまぐに句を作りて…

…(第十六)

といふのも亦作られた誠と自らなる誠との差を設け、誠が遂に細工・偽と相容れぬことを述べた言に相應するが、幽玄といふのによつて鬼貫の冀つた心の深さが俊成等の中世歌論によつて影響を受けたことを偲ばせる。

古風もむかしハ當風ならし。今ハた當風とおぼしき句も又いつしか古風となり侍らん。古風といふも當風といふも、ともに作り求めたる句のすがたによりて、新古の名ハあれど、修し得てまどの道を行けん人の句ハ、幾とせ經るとも新古の差別ハあらじ。只この道に深く心を入なん人のまれなるこそなげかしけ。(第二十九)

當風・古風は夫々貞徳風・宗因風の俳諧を指して然も一應兩者の間に新古の別を立てるけれども、この新古も遂に絶對的なものでなく他日新風も古くなつてしまふ。ところが永久に新古の別を超えたものがある筈で、そのためには愈々誠の道を修しなければならぬとした。鬼貫によれば、誠の句こそは古びる恐れが全く無かつたのであるが、彼がかうした諦念を把握する暗示は前述のよき歌の例によつたのだらう。然るに同種の思想を披瀝するものとして去來等の説く不易流行の句のことが思ひあはされる。即ち「去來抄」には不易の句及び流行の

句を別けて、貞徳以来の古風が宗因によつて打破され新風が天下に流行した。然るにこの新風も一處に停滯して變化が行はれなかつたのに、「先師（註、芭蕉）はじめて俳諧の本體を見付、不易の句を立、又風は時々變ある事を知り、流行の句變ある事を分ち教へ」たとし、又「不易は古によるしく、後に叶ふ句なれば、千歳不易といふ。流行は一時々の變にして、昨日の風今日よろしからず。今日の風明日に用ひがたきゆへ、一時流行とは云、はやる事をいふなり。」とも論じた。不易流行と不易の句流行の句とが果して全同か否か問題の生ずる所だが今は暫く問はぬ。それにしても、永遠に古びない句を想定しこれを最上と見る點は鬼貫・去來共に同じである。而して誠の介入を明白に指摘する點では鬼貫は土芳とも亦同じで、蕉風俳論と鬼貫との間には多少の交流があつたのかもしれない。鬼貫・土芳の交渉を見るに、土芳が「師の風雅に萬代不易有。一時の變化有。この二つニ究り、其本一つ也。その一といふハ風雅の誠也。不易を知らざれば實にしれるにあらず。不易といふハ新古によらず、變化流行にもかゝわらず、誠によく立たるすがた也。代々の哥人の哥をみるに、代々其變化あり。また新古にもわたらず、今見る所むかしみに不替、哀成うた多し。是まづ不易と心得べし云々」（『三冊子』）といふのは去來よりも更に鬼貫に近いやうだが、土芳が風雅

の誠、鬼貫が單に誠と呼ぶ兩者間の異同は更に考究を要しよう。然るに土芳は『三冊子』中必ずしも誠に風雅のを冠してばかりは居らず、語の使ひ様からしても相等しいやうに解せられる。のみならずこれ亦前引の鶯・蛙の場合（第三十三）及び月雪花草木自身が感に堪へぬとする程に心詞が相叶はなくては誠が少ない（第五）とした言などに見ても、物そのものの本情に徹しようとする點のどこに差異があらうか。松の事は松に習ひ竹の事は竹に習へ、と芭蕉が教へたのは私意を去れの意だつた（土芳による『三冊子』）が、松乃至は竹の本情に參入せよ、そのためには私意即ち我を捨てて物と我とが一つになるべきだとする主意ならば、鬼貫との間に幾何の逕庭も見出し難い。

俳諧の大道ハ言習ふにも得ず、句のかたち作りならふにもえず。只我が平生の氣心高天が原に遊んで、雪月花のまことなるに戯れ、神妙をしらば、目に見えぬ夢の浮橋足さへらずして、踏に心よき地平／＼ならん。その花に鳴うぐひす、其水にすむ蛙、いづれの哥袋もすべて天地の袋なり。……（『俳諧高砂子集』鬼貫序）

と、心を高く悟り、雪月花の本情を認めようとしたのも一層兩者間の近しさを證する。かやうに文藝論乃至は俳論としての誠説は、飽く迄も心を主位に置いて詞の巧み・姿の飾

を排し、作意や細工を避けようとするところに中心があつた。さうして倫理的な面との連繋は我（小我）を捨てて大我に就くといふ一點に存すると約言できるやうである。

四

成（鳴）嶋錦江（寶曆十年歿）は江戸住の人、徂徠の説を喜び享保の間に當つては禮記・明律を將軍に講じ寵遇を受けたが、一方和歌をも善くし冷泉家について學んだ。家集を「みよのなみ」と名づけたのは冷泉家三代の點定を歴たのによる、と『漢學者傳記集成』（竹林貫一氏編著）に記してあるが、錦江の記したものに「子姪に俳諧を禁ずる文」一卷が傳へられる。その論旨は漢詩・和歌の側から俳諧を批判してあるが、俳諧が詩歌連に伍して風雅と呼ばれることの不當、俳諧の側から和歌等を評してぬるし・せましといふことの僭越な所以等について述べてゐる。錦江は前記の如く漢學歌學の素養が深かつたから、その見解は漢學者や歌學者の一部で抱かれた俳諧に對する蔑視の態度を代表するといひ得ようが、

世に俳諧といふ事の候。濫觴は連歌の流にながれて、無下の凡卑なる心詞をもつよりなせるもの也。其さましらぬ人は、しら雲の上なき翫とおもひ入て、その席にもものして、斧藻をこととする類をば、知識の

はまれをもて稱するたぐひも候。まだ世づかぬ人の子などをすゝめて、その遊びにいざなひもてゆくままだに、はては遊君傾國のなさけに通ぜざれば、いたらぬくまなひあるなど、いひもてさはぐに心ひかれて、富めるにあける家をもうしなひ、箕裘をつぐべき輩も、羊をうしなへる類のみおほく候。それが文字をもて、やまとぶみのやうの事かけるを見るに、下しうきたなげなる、いふべくもなく見えて候。なべてこれにもものする人を見るに、軽々なるふるまひをのみ好みて、萬のどめたるかたなし。……（『三十幅』による）

とて、俳諧を卑賤とし、或いは家業を疎にする點等について述べた。又彼は近頃數奇なる語が誤り用ひられることが多いとも、風雅は忠孝の道に通はねばならぬとも書いてゐる。錦江の論鋒はかの墮落した享保期の江戸俳諧を目標としたのもあらうが、然し貞徳を直接引き來る點から見れば俳諧全般に對する非難の言とも解せられるのである。ところが鬼貫の立場は錦江流の俳諧觀が誤謬なる所以を物語るのである。そのことは錦江に先んじて述べられたが、然し錦江に等しい俳觀蔑視の態度は芭蕉や鬼貫の時代にも亦無力ではなかつたにも拘らず、彼等は俳諧が風雅と呼ばれべきであつて詩歌連に比肩し得るものとの確信を有したし、又それに應ずるだけの眞摯さを以て俳諧修行に努めて行つた。かう考へて來ると、錦江の如き意見は終始詩歌の側に蟠居し有力でもあつたらうが、既に確立せられた正しい俳諧觀を覆

し得る力は無い。かうした人々は自らの狭い風雅觀に囚はれてゐる間に、俳諧は和歌のうち
に歸一すべきものを認め、これと同列になるための刻苦精勵を重ね鍛錬を加へて遂に風雅の
世界を更に擴めもし深めもしたのであつた。

かやうに俳諧が和歌に歸一すべきことを自ら悟つたと見られる以上、歌學が俳論に及ぼし
た感化の大きいことは特筆せられるべきである。故土田杏村氏は『國文學の哲學的研究』に
於て武者小路實陰・烏丸光榮等の歌論と鬼貫俳論との相互交渉について論じられたが、有賀
長伯の如きは鬼貫に對して感化を與へた歌學者としては蓋し隨一だらう。但し長伯と鬼貫と
の交際がいつ頃迄溯り得るかについては明確にし難い憾みが感じられるには違ひないけれど
も、鬼貫の大悟は如何にも鬼貫らしく孤獨裡に案じられたものと解せられるから兩者の親交
は餘程後年に降つてからのことだらうと推測する。それは恐らく俳諧歌について傳授を與へ
られた享保初年頃だつたやうに思ふが、既にこの頃迄降下して來るならばたとひ鬼貫が長伯
から教へられる所ありとするも、従前鬼貫が持し來つた根柢をいたく動搖せしめるやうな異
種の理念ではなくて、むしろ歌俳の吻合を素直に認めさせる底のものだつたらう。即ち鬼貫
から見るならば、これ迄に抱懷した和歌歸一の念をば更に歌學專攻の長伯から明確にせられ

たといふ範圍を多く出なかつたのではあるまいか。この點に關しては「獨言」の解説にも少
しく觸れておいたけれども、ここにもう一度再言する次第である。とはいへ長伯との交りは
鬼貫に多くのものを加へただらうから、何も過少評價をしたり輕視しようとするのではな
かつた。「獨言」に贈つた長伯の序文中幽玄・妖艶・誠の語彙が用ひられ、のみならず歌俳一
致の思想も見られる。これは鬼貫にとつては一々自己の思ふ所に恰當するの念を強めさせ奮
ひ立たしめるものであつたらう。現に「獨言」には「聞えぬといふ句に、幽玄と不首尾の差
別侍り云々」(十六)の條が出てゐて、達人の無色無香をば修行の未だしき者が徒に忖度した
りする心無き振舞ひを片腹痛く感じさへするものも、すべては長伯の序に相應するのでもあら
う。又長伯の傳書を見ても、卷末に「右之條うたのまゝかたにかざるべからず。今日の行
狀にあてゝみるべし。五常五戒もみな此内にこもるべし。尤教誡の至極なるべし。」といふ
條の如きも、明白に鬼貫の思想と相合致することを知り得る。そして長伯の説くやうに和歌
が五常五戒を内に含み教誡の道にも叶ふといふが如きは中世歌學の繼承であるが、「獨言」
序文にも俳諧が「人倫を和し、人の心を慰むるはまた和歌の徳に變らずや。」と述べてゐる。
鬼貫が「獨言」に詳論する所は遂にかうした長伯の所説の敷衍ともいへなくはないのであつ

て、「獨言」に至つて斯く迄も鮮明な敘述をなし得るやうになつたのは、繰り返す如く長伯の感化も亦大だつたことを感じさせられる。鬼貫がその久しきに互る俳諧修行の結果、和歌との一致に想到したのは正に然るべき所で、芭蕉と同様に俳諧の地位を高める者としては俳諧に心魂を打ち込んだ者の力による他には無いのだといふ意氣込みがはつきりと分る。けれども、このやうな教誡説を採つた者が俳諧の先徳者中に皆無だつたのではなかつた。古俳諧が滑稽を旨としたことはいふ迄も無いが、餘りにも戲謔を恣にせんとする傾向が強かつたことも否定できず、時としては博奕の徒と同一視せられもした。その意味では前引錦江の所説にも首肯すべき點が全く無いわけではあるまい。貞徳は宗鑑の「犬筑波」に改訂を施さうとして、「いかに俳諧なればとて父母に恥を與は道にあらす。儒道は云に及ばず、佛道にも不孝はいましめたまふぞかし。」とも「和歌は云にたらず、連歌俳諧皆人の教誡のはしとなるやうに」心掛けなくてはならないとした（寛永廿年 新增犬筑波）。貞徳やその門人が説くところの俳諧も亦和歌の一體とする思想は不易流行の中の不易に相通ずるとはいひながらも、右に述べたやうな教誡説が主たる内容をなしてゐたともいへよう。貞門に續いた談林、従つて伊丹風が放縱・無拘束・卑俗等諸々の弱點を包藏することについて鬼貫は反省するに至つたわけ

あるが、その際鬼貫も亦教誡説に従つた。詞は古くても心は新しくあらうとする態度が定家の言説によるのは固よりのことだが、この定家の言は貞門の方でも度々引用せられた。ただ在來のものに俳諧としての命を與へたのが鬼貫であり、又芭蕉だつたといへる。

鬼貫は和歌を「我朝の法」とし又常とした（『大悟物狂』跋）が、又「獨言」では大悟に到つた所縁としての「よき哥」について述べる場合には「つら／＼よき哥といふをおもふに、詞に巧みもなく、姿に色品をもかざらず。只さら／＼とよみながして、しかも其心深し。」（第五十一）といふだけだ。この言葉は幽玄の味はひ深き古歌を意味するのだらうが、特に芭蕉の如く、後鳥羽院を始め奉り、俊成・西行・定家の名を擧げるのではなかつた。この點では芭蕉に比して鬼貫の方に茫漠とした感が伴はぬでもないが、然し幽玄・妖艶が問題とせられる限りでは俊成・定家の事を念頭に置くこといふを要せぬし、心敬等の連歌の名家を敬慕したことは、たとへ明言しないにしても證とすべきものは求め得る。尤も芭蕉が西行等の名指しを頻繁に行つてその心を心ともし、足跡をも慕つたのに反して、旅と關係の少なかつた鬼貫には芭蕉に匹敵するやうな言及なり行動なりは顯著ではなかつた。のみならず同じやうに誠について強調する場合に於ても、芭蕉の方には風雅の誠を中心として論ずることが多

かつた。

師（註、芭蕉）の曰、學事ハつねに有。席に望て文臺と我と間に髪をいれず。おもふ事速にいひ出て、爰に至て迷ふ念なし。文臺引下。せば則反古也、ときびしく示さるゝ詞も有。

或時ハ大木倒すとし。鏝本に切込心得、西瓜切ル如し。梨子喰口つき、三拾六句ミなやり句など、いろ／＼にせめられ侍るも、ミな功者の私意を思ひ破らせんと詞也。（三冊子）

これは士芳が芭蕉の誠即ち私意を去ることについて論ずる條に出す一節だが、ここには如何に藝道論的色彩が濃厚であらうか。勿論芭蕉にしても俳諧が能く志を養ふことを知つてゐた筈であるし、多くの事例を見ても俳諧に於ける教誡的な面の存することを無視したのではあるまい。そのことは例へば『奥の細道』高館の條や嵐蘭の追悼の文を見ても義の念に強いのに感激してゐる程で、芭蕉がこの面を重んじたことは喋々する迄も無い。然しその面は多く内に籠められて風雅の面が捕へられたのは純藝道に生命を捧げた人として相應はしいといへよう。同時に鬼貫が藝道論の面と共に、倫理的な面——これは今や教誡の面といひ改めて然るべきだらうが——をも多く説いたのは家職に勵んで俳諧に遊んだ人として真に相應はしい

ともいへる。但しその多少の度はどこ迄も比較的問題であるし、況んや鬼貫が芭蕉よりもより倫理を重んじたと速断しようといふのではない。何故なら藝道の鍛錬は直ちに人格のそれをも意味するがらで、人としての芭蕉に敬慕すべき點が多いのは鬼貫の場合と同様であるが、兩者言説の表面に現れて來る場合に差が生ずるのは生活の差によるものが頗る大きからう。さういふわけで、旅人芭蕉と導引鬼貫との相違は夫々の俳論にも投影すると評し得るだらう。

富士谷御杖はまことを言と事との両面に別けて考へたと久松潜一博士は説かれるが、言に現れては藝道論、事に現れては教誡説となると見られないだらうか。若しさうなら、芭蕉の場合に於ける風雅の誠は言の方に多く傾いてゐるともいへるかもしれぬ。とにかく風雅の三字を冠しよう冠しまいと何れの差無く合致することだけはいへるだらう。

鬼貫は性質の素直な人が俳諧では嘘言を述べて喜ぶ痛ましさを歎いた（『獨言』第二十七）が、この一言だけを以てしてもその人柄の正しかつたことが窺へる。實はその一致を期した點にこそ誠説が採られたとも見えるが、具原益軒の『養生訓』（正徳三年）にも「醫となる人ハ、せづ志を立て、ひろく人をすくひ助くるにまとの心をむねとし、病人の貴賤によらず、治を

ほどこすべし。」(卷六)等誠の語を多く用いた。元祿時代は一般に奢侈頹廢、人倫の紊れた時代として理解せられるが、有識者の間には健全なる思想が護持せられ大衆も亦多くさうだつたのであらう。これには儒教倫理の普及も與つて力があつたらうが、然し清明直を尊んだ日本古來の傳統によること最も大だつたらう。

五

鬼貫の説く誠と、蕉風で述べられる風雅の誠とが大體相一致することは次の點からだけでも證し得る。即ち戀の附句を中心にした態度で相互に共通するものが認められるのである。尤も鬼貫の誠説にしても蕉風の風雅の誠にしても、單に戀の附けだけを對象とするのでないこと説くまでも無く、範圍はもつと廣いのであるが、風雅のを冠すると否とに拘らず兩者間には密接なる交渉が存在する。なほこの際蛇足のやうだが一言申し添へて置きたいことがある。それは他でも無いが、戀の附句云々といふとまるで遊戯的に感じられ眞率を缺くかのやうに聞えるかもしれぬけれども、實は決してさうではなかつた。和歌の方で見ても、萬葉を始め古今以來の勅撰集にも如何に多くの相聞歌や戀の歌が収録せられてゐるかを想起するだ

けでも、俳諧が遂にこの傳統を出るのでなかつたことを諒解し得よう。さうして嘗てはここに個人的な感情を中心にしたものには違ひないが、物のあはれの最も端的な顯現が認められたのであらう。然し今斷つた如くに戀愛の情はどちらかといふと私情であるから、決戦下の今日に於て特に強調するやうな態度は當然憚らなくてはならないが、然し古典の研究に於てはことさら言及を避けてそのために結論が曖昧になるといふことが考慮せられる限りでは、一應の吟味が許されてもよいのであらう。この點本書では前に鬼貫・淡々の交渉に於ても同種の點を中心として述べ、今再びこれに觸れざるを得ないので豫めこのことだけは記しておきたい。

さて「獨言」は一卷盡くが誠の書と呼んでよからうが、そこには上卷で屢々誠説についての説明が加へられ、下卷では四季・旅・戀・祝に分けて記してある。四季は固より旅・戀を重んずるのは蕉風の場合でも同様だが、鬼貫が戀に於て從來規定せられた所謂戀の詞といふやうな形式的で詞中心の域から脱し、心を中心とするやうになつて來たことは明白で、前引の如く上卷に

戀の詞をさへいへば戀の句なりとおもひて、本情なき句もおほく聞え侍る。詞に戀へうす

く侍るとも、心の深からんこそこのむ所に侍れ。しかはあれど、俳諧の修行もなく、心のミதாகくとまりて此所を仕侍らば、かへりてひがどにも成侍らんか。

といふのも結局心を主とし詞を従とする定家等の態度を繼承するし、又心の誠を重んじた鬼貫一般の考へがたまたま戀の附句の場合にも現れたといへよう。

他方蕉風の方では、普通ならば戀の附句が求められるやうな場合でも一句だけで捨てて、従つて戀の句として成立させないやうな場合が著しかつた。特にこれは晩年の芭蕉が敢へて採つたところであるが、芭蕉は何故さうしたのだらうか。芭蕉の採つたこの態度について記した門人の記録は多いが、淡々の『其角十七回』半には、

晋子(其角)と夜話の時、翁(芭蕉)云、「むかしより人の殘せし戀をせば」といふ出戀の句に、「額額を何に撫ん夕暮」と附たり、とお申あれば、其角いへるハ、戀の句一句にてお捨有ると未練の連業申べし。さあればとておかしき附句也。今迄もこの難れをいひもてなさず。昔より附戀のしみしたゝるきをさとしめんためのよき教成べし、といはれけるとぞ。

とあるのから見ると、其角を相手にして芭蕉は自己の心懷を述べたやうでもあるが、其角系の淡々がいふことだから師を揚げようとするつもりだつたかも知らぬ。只實例を出したのが

一寸注意せられる。直門の間では、杉風が

一、翁古法を打破申ゆ事ハ戀也。戀の句ハ、句姿ハ替りても句の心ハ同じ事也。戀の心に替りたる心なし。然上ハ戀の句ハ二句にて捨べし。若宜キ付句無之時ハ、一句にても捨べし。戀の句一句にて捨る事、古法ニ無之事ハ皆人のしりたる事也。見落しに成ともすべし。かならず、戀の句つゞけ申事無用と申置ゆ。(藥時宛書翰)

と認めるから、芭蕉の遺語を傳へたものとしては毫も疑ふことはできない。さうして杉風もいつてゐるやうに、斯く一句だけで捨てることはとりも直さず古法を破る結果にもなるのだが、然し芭蕉は何も無定見でかうしたのではなくて「宜キ付句無之時」に限られてゐたのである。芭蕉が戀の附句で實にすぐれた手腕を發揮したことについては定評が存するが、さうした芭蕉にして初めて能くなし得るところであつたに違ひない。この芭蕉の見解は門人等の間に喧傳せられたやうで、『去來抄』にも同様の記事が載り、然も杉風よりは遙かに詳細でもある。

卯七・野明曰、蕉門に戀を一句にて捨るはいかに。

去來曰、予此事を伺ふ。先師(芭蕉)曰、古は戀の句數不定。勅已後、二句以上五句と成

る。是禮式の法也。一句にては捨ざるは、大切の戀句に挨拶なからんは如何と也。一説に陰陽和合の句なれば、一句にて不可捨共いへり。皆大切に思ふ故也。予が一句にても捨よといふも、いよ／＼大切に思ふゆへ也。汝はしるまじ、古は戀出ればしかけられたりと挨拶せり。又五十員百員といへども、戀の句なければ一卷とは云はずしてはしたものとす。かく計大切なるゆへ、皆戀句になづみ、わづか二句一所に出れば幸とし、かへつて卷中戀句稀也。又多くは戀句より句しぶり吟重く、一卷不出來になれり。此ゆへに戀句出て付よからん時は、二句か五句もすべし。付難からん時は、暫時不附とも、一句にても捨よと云へり。かくいふも何とぞ卷づらのよく、戀句の度／＼出よかしと思ふゆへ也。勅の上を云はいかゞなれ共、夫は連歌の事にて、俳諧の上には有らねば奉_レ背にもあらず。しかれども我古人の罪人たらん事をまぬがれず。只後學の作しよからん事を思ひ侍るのみ也。

以上が全文だが、これを見ても芭蕉が時に戀の句を一句で放棄した所以が實は戀の真情流露を庶幾せんためであつたことが分明となり、他意が無かつたどころか非常に高邁な扱ひ方だつたと評せざるを得ない。勅に背き奉ることを恐れてゐるのはこれ亦芭蕉らしい敬虔さを物語る。なるほど連歌では「戀の句、只一句にて止むる事無念云々」(連歌新式追加)とせられ

るが、芭蕉は他の方面でも俳諧は連歌に比して制式が緩いから許されるだらうかとも考へてゐた。而して實は鬼貫にしても芭蕉にしても、和歌連歌に見られる戀の情に劣るまいとしたともいへなくはないのであつて、鬼貫は勿論芭蕉も亦戀の附句に於て不易の一面を把握してゐたといへるだらう。

直門中、杉風・去來に次いで土芳も亦「三冊子」でやはりこの問題に觸れ、戀の事を先師いわく、むかしより二句結ばざれば不用也。むかしの句ハ、戀の言葉を兼而集め置、その詞をつゞり句となして、心のこひの誠を思ハざる也。今おもふ所ハ、戀別而大せつの事也。なすにやすからず。そのかミ、宗砌・宗祇の頃まで、一句にても置べきかと也云々。

といつてゐる。土芳の如きは最も熱心に風雅の誠説を執つた人であるが、ここでは「心のこひの誠」と記すのである。これと鬼貫言説との間には全く相通ふ點が顯著だと斷じて少しも不當ではない。斯く考へて來ると、全面的の一致について云々することはたとひ避けるとしても、詞から離脱して心の域へ深まり行かうとした同じ努力が戀の附句を中心として試みられたことが分り、延いては鬼貫・芭蕉の期したところは相等しかつたといへると思ふ。

女ほ支考も「續五論」の「戀論」で、「芭蕉門下に戀を一句にて捨るといふ人あり。其さたなきにあらねど、師にうとき人の一筋にいへるなるべし。」と書いてゐて、他の同門とは稍、違つた見解を示すやうである。この「續五論」では戀論の他に旅論もあるが、その筆致を鬼貫の「獨言」に比するならば同じ主題をめぐりながらも詩人的資質に於ては遙かに劣るものあるを感じさせられる。世には時として、鬼貫は論はなるほどうまいが作には感心できないといふ人無しとせぬが、その誤謬なることは支考と比較しただけでも十分であらう。要するに鬼貫と比肩し得る者を探すならばやはり芭蕉その人を措いては他に無いと斷じられるのである。

(註) 一般に俳諧作法書は、四季の詞の他に戀の詞を網羅し、實作者の便を計るのが常である。従つて一その例を擧げるのは煩しいけれども、今その一斑を引いてみると、例へば『誹諧初學抄』の「戀之詞」には女・よめ入・習入・夫婦を始め數十を出してあり、爾後の作法書も亦然りである。而して斯かる詞を用ひた句はすべて戀の句とせられ來つたのであつて、詞中心であり形式的と呼ばれる所以である。蕉風の頃になれば漸くこのことは超克せられようとする傾きが強いことは本文に述べた如くで、許六・李由共撰の『字陀法師』(元禄十五年)にも「近年俳書とて戀の詞を拵へ置へ、其人の胸中せべき事しれたり」と斷じてゐるほどである。

寫眞版解説

鬼貫畫像

越中の人八椿舎康工撰『俳諧百一集』に出る。自序に寶曆十四年とするが、刊行は遅れて明和二年京橋屋治兵衛より上梓した。

歌に百人一首あり、連歌に連歌仙あり。それになぞらへるにはあらねど、予此道に執心ふかく、いにしへを慕ひ今をたづね、高吟感のあまりにみづからその人々を畫き、朝夕師を仰ぎ友を愛すると、何所となくもれて云々

と自ら序文の冒頭に記すので本書成立の事情が知られる。芭蕉以下各俳家の畫像と代表句とを擧げるが、その像は何によつたのか分明でなく單に想像の餘に成つたのかもしれない。然し十五丁表に掲げる鬼貫像は頭髮を撫で付けにしてゐて導引家らしい風貌が窺へぬでもない。句は

春雨のけふばかりとて降にけり
で、評には

鬼 貫

何となく述たると、真に春雨の動かぬ所、七もじに言外の妙あり。これらハ時節の景氣、其時に當て本意有べし。

と推賞する。もと「大悟物狂」に

やよひ三十日の雨を

はるさめのけふ斗連降にけり

と出るもの、従つて「佛兄七車」「鬼貫句選」にも所收。

彌生三十日の雨を

春雨のけふばかりとて降にけり

〔佛兄七車〕

彌生晦の雨を

春雨のけふばかりとて降にけり

〔鬼貫句選〕

「獨言」には春雨について「春の雨ハ物こもりて淋し」と書いたのも参照すべきだらう。

同じ康工の「俳諧金花傳」(安永二年)には「獨言」の記事を引き、芭蕉と相對して考へてゐ

るが、康工は蕉風の流を汲む徒でありながら、鬼貫に對しては一通りならぬ敬慕の念を寄せたやうである。

一、鬼貫老人の「獨言」ニ、或時ハ句も成やすきやうに覺、又あるときハひづすら成難くもなり侍らん事幾かハリもあるべし。深く入なん人ハ其程々に功積りて猶むづかしきを覺侍らん。執行の道に限りあらざれば至り止るおくもあらじ。只臨終の夕までの修行と知るべし。今時ハこゝろ皆先走り、いつしか人もゆるさぬ上手にハ成けらし云々。されバ五とせ十年の俳諧に遊びし、稍やハ口走りてまぐれ當りに極りもせぬ點者の賞をうけぬれば、やがて意氣の揚るに任せ、世上に人なきがどく、行脚などの志を建て、人の欺けるを痛しとせで、罵りありくを、俗に盲目蛇くらまに威すとなんいハつべし。是もて他の家より誹人を拙きなどはやしけるこそ斷りなれ。鬼貫の恥給ひぬるを、若き衆中ハ必心得たき事に思ひ侍る。

多度権現にて

宮 人 よ 我名を散らせ落葉川

解云、眞の人ハ智もなく徳もなく功もなく名もなし。誰か知り誰か傳へん。是徳をかく

し、愚をまもるにあらず。本より賢愚得失のさかひに居らざれば也。下略。例に増賀・西行のあとをしたひ給へる法樂の心、誠に殊勝といふべし。多度権現ハ伊勢美濃にあ

り。……
なほ伊丹墨染寺には公長といふ人の筆になる鬼貫肖像が藏せられるが、その確實性については知らない。

いなれぬや雪を下客に
一夜庵 鬼津ら

讚岐興昌寺境内の一夜庵は俳諧文藝の先徳として尊敬せられる山崎宗鑑が一時杖を留めたゆかりの土地として古來有名である。一夜庵關係の遺墨類は宗鑑のものを始めとして現在では興昌寺に委管せられてゐるが、ここに出した鬼貫の短冊は「一夜菴筆海帳」と名づけられる短冊帳に貼付せられる約三千の短冊中の一枚であつて、ここを訪れた人々乃至は宗鑑を慕ふ人々が納め季吟・梅翁（宗因）を始め貞門・談林以降現代の諸家を含んでゐる。この「一夜菴筆海帳」の名及びその中の眞蹟若干については、既に『有明演』に記事が掲げられてゐる。

『有明演』の完本は乾坤の二冊であるべく、阿誰軒の『誹諧書籍目録』には「有明演 二寶永二年 二夕五分」と出るが、名古屋市藤園堂文庫にはその乾卷を藏せられる。半紙本一冊、序文はかの舍羅で、それによると、「讚の観音寺といふ長市に久目氏一砂といへる好人」があり、この一砂が中心となり、弟の鐵砂が後援して撰んだことが知られる。「一夜菴筆海帳」中の一砂眞蹟「月や散らむひききに明る一夜菴」の傍には、當所久治目太郎左衛門一砂と記されるから、久目氏は久治目氏を略したのであらう。因みに書名として用ひられた有明演は観音寺町の海岸を指して呼ぶ地名であつて、土地の香が強く、従つて一夜庵關係の記事が見えるのも當然であるが、その本文の冒頭たる第三丁には

宗鑑法師一夜菴は七宝山興昌寺の境内に結び置れし、老衰のありさまみづから
きざみて、今も菴のあるじとなりぬ。志をはこびしともがら相續なさしめんた
め諸國の誹士に自筆の短策を乞、あるひは抖擻行脚の人のとぶらひよりて、懐
舊のこゝろを述しあり。凡一千余枚舊草に残れり。しかるにわづか二十余句、
季節を不し考して、こゝにむすび侍る。

花にあかたたとへばいつまでも一夜菴

梅翁

まゝよ世は夏の一夜のかりの菴
 下の客とよしいへ月に一夜あん
 咲やこの梅谷のあといちや菴
 いなれぬや雪を下客に一夜庵
 とは夕花にはつらし一や菴

季吟
 一三
 伊丹宗旦
 同 鬼貫
 大坂青流

以下この土地の人々や舎羅・三千風等の句をも併出するがここには省略する。今直接関係があるのは言ふ迄も無く宗旦と鬼貫とだ。青流は後ち江戸に出て祇空と改め享保時代の俳家として重き位置を占めたが、大阪の出身で始め惟中に従ひ、芭蕉にも入門した。短冊は「もは夕花にハつらし一夜庵」と讀むのがよいやうで、もは一見とと讀まれさうだが、もはやのやを脱してあるのではないだらうか。傍に伊丹屋五郎右衛門稻津氏青流と書かれてゐて、家祖は伊丹から出たもののやうだ。「在岡逸士傳」にも竹尊者祇空居士書敬雨菴中と署名するから、百丸と懇ろだつたことを證する。兩者は共に享保期の俳家としての因みばかりではなくて、伊丹出身といふこのやうな所縁も亦斯くならしめたのだらうかと思ふので、ついでながら一言書き添へて置いた。若しもかうした具合に諸家の短冊を中心として紹介と解説とを加

へて行くならば、相當長いものとなるので省かざるを得ないけれども、参照すべき價値はあるのだ。宗鑑のことについても極く簡単にしか言へぬが、これ亦他日機を得て一文を草したいつもりである。

さて、宗旦の短冊には「咲やこの梅谷の跡一夜菴 宗旦」とあり、「有明濱」にあつとし「いちや菴とするのと違ふが、昔の書には必ずしも原物通りに複製せぬものが多いから、この場合特に答むべきことでもない。句中の梅谷とはこの寺の住持、上洛して東福寺に修行中宗鑑と親しかつた僧で、宗鑑はこの舊友を訪うて観音寺に來たといふのを詠み込んだのであつた。筆蹟は宗旦獨特の筆致だ。鬼貫のは宗鑑が

一、上の客人立かへり 一、中の客人日がへり 一、とまり客人下の下（萬治三年）

と書いた——後には「上は立ち中は日ぐらし下は夜まで一夜どまりは下々の下の客」となつた——（顯原先生「山崎宗鑑傳」によつた吟だ。異説によるとこの三ヶ條書きは山崎でのことだともいふのに、鬼貫は名の示すが如き一夜菴所在地のことと解してゐるわけだ。その何れが正しいかについての考證も今すぐはできぬけれども、この鬼貫短冊の傍には大坂の二字が記されてゐる。大阪住の鬼貫から送つたといふのか、鬼貫は大阪の人といふのか明か

でないが、多分前者だらうと思ふ。句意は雪景色が美しいので歸ることができないので泊らうとするが、下々の客として誘られるのも厭はぬといふのである。鬼貫が實際一夜庵に來たかどうか分らぬが、一夜庵の周圍、松の多い琴彈山一帶の雪景色がよいことは勿論で、直ちに鬼貫の來訪を否定し去ることはできぬ。がこの短冊帳の前に宗且の句を始めとして、

咲やこの梅谷の跡一夜菴 宗且
菴の花に上客つらし遅作人 鐵幽
いかに尾花心もしらで一夜庵 長室
月一夜法師にとはん何の客 一搏(青人)
鶯に誰も下客の夢の菴 定友
今さらに年の名残や一夜菴 濁水
不二遠し雪の新山一夜菴 林犬
あけぼのや柱の霜の一夜庵 好昌
軒の月限りぞにくし毎夜庵 百丸

の如き伊丹諸家の美しい短冊がずらりと並んでゐるのを見る時、これは彼等の慕ふ宗鑑の遺

跡に贈られる四季夫々の吟詠として各自が物したのに違ひないといふことがほぼ確實となる。誰がそのやうな獻納の發企をなしたのかは無論斷言できないが、『一夜菴建立緣起』の撰者たる惟中が擬せられなくは無い。「花ぬらんや第三第四の琴彈山」が一時軒惟中の短冊だが、あの『一夜菴建立緣起』は延寶九年辛酉西莖會吉且の奥書があり、大坂北久太郎町 心齋橋筋 本屋平兵衛、愚常の刊行である。半紙本一冊、廿一丁より成る。原本綿屋文庫藏。内容は先づ惟中の「讃州七寶山興昌寺のかたから一夜菴宗鑑法師影像安置の來由をのぶる狀」が第一丁より第六丁迄續くが、延寶九年辛酉八月廿四日の作、次に宗因の「讃州豊田郡七寶山興昌禪岨宗鑑再興の釋迦堂造立ならびに宗鑑法師自作の影像安置の一夜菴造立せしめむとこふ狀」が第七丁から第八丁迄出てゐて、延寶九年月日の作、更に第九丁からは宗鑑法師自筆勸進帳が第十一丁表迄の間に掲げられる。而して以下は延寶九年八月廿四日興行

百餘年也きのふの月の一夜菴 一時軒
聲はくちせぬきりくす筆 宗實
秋の草右の條く色くれて 梅翁
役人かはりあらじといふらん 勝政

その日の料理問答 鳥の空 一 禮
 京と當地の雲くらべけり 益友
 御ながめなにくれとなき山ざとは 夕鳥
 下卑てやさしき雪のあけぼの 正信 (下略)

を表八句とする百韻一卷で、出座の人々及び句数は一時軒八・宗實六・梅翁九・勝政七・一禮一・益友一・夕鳥七・正信六・竹馬一・清流七・一興五・一好四・荷平一・天鹿二・野牧一・宣衆四・溪中一・尹子一・一砂一・昨非五・喜之三・梅圃五・東子六・西波一・江流五・貞因一・執筆順可一。最後に追加哥仙獨吟と題して、梅翁の「花にあかて譬ハいつまでハも一夜菴」一時軒脇「しかるへき舛こゑのうくひす」の兩吟歌仙一卷を添へる。参考のため惟中・宗因の文から一二の點を摘録してみると、前に一寸觸れておいた梅谷並に宗鑑の事蹟について惟中は「永祿年中に精舍おほくすたれ、檀林悉やぶれけるとぞ。其ころの住持伊陽の碩徳梅谷和尚なり。和尚の行狀里人つたふ。梅谷和尚ほまれたかく、道おほいにしてますく祖風を仰ぎ給ふにより、圓覺見等持策彦和尚みづから道號をあたへ給ひて、くまなく人のしりける事也。道號の三四の句に、黃鳥遷喬出幽處、起居萬福喜聲新也。とあそばし

ぬ。元龜三年夏五月の筆、いまの代までもあとたえずかし。この梅谷和尚に隨身せる宗鑑法師ハ俳諧のもとつ祖にして、いつの月いつの日にかありけむ七寶山の側に逍遙して破笠をぬぎ、瘦藤をとめて興昌寺にあかしくらし、禪窟の佛閣釋迦堂のかたぶきこぼれたるをかなしみて、梅谷和尚と心をひとつにし、鑿法師勸進帖一通をみづから作りし、みづから筆し給ひて、つゝに修造の功をなし云々」といひ、又一夜菴の名の由來に關しては「上客立歸、中客一日、下客泊懸」と記し、狂詠としての形は出ない。ところで、延寶九年に及んで再び宗因・惟中の勸進が行はれたのは何によるのか。いふ迄も無く、談林では先達として特に宗鑑・守武を尊んだが、宗鑑のゆかりある一夜菴にその影像を安置し、又宗鑑再興の釋迦堂を造立するためだつた。而してこのためには「一夜菴造立の助成を千萬の俳士にすゝめ、一尺の木をきり一簣の土をはこびて、すたれを興し、たまたるをつぎ、足引のやまとしまねの作者に自筆のたんざくをこひ、宗鑑法師千古懷舊の情を顯ハし、この鑑師の影像とおなじく萬代不朽の寶とせんと願つたのであるが、土地の中心人物は前引百韻の脇を附けた宗實で、上阪の上で惟中等の協力を乞うたのだつた。伊丹諸家の句が斯くも纏まつてゐる理由はこの勸進に應じたのによると見る他は無いが、字體はもとより、短冊そのもの及び句意が如實に以上の事實

を裏書きする。されば作年時等迄も明白にすることができ、實に珍重しなければならぬ。

伊丹の人々も亦この催しに應じて贈つたのであらうが、この中で定友は「壯年懐病而死」と惜しまれる維舟門（『在岡逸士傳』）、鐵幽は元祿二年歿（同）だから、延寶九年（天和元年）頃といつても甚だしい誤ではない。のみならず鬼貫のこの筆致は後年のそれではあり得ない。同種の筆勢とせられる短冊に正木瓜村氏藏「進みけり白柄の切貝風呂吹の兵 鬼つら」があり、「伊丹風俳諧全集」上巻に收められる。岡田利兵衛氏はこれが解説に『古今短冊集』に出る「米泥に齧ねざめつ徳利蚊屋」と對照せしめ鬼貫筆としての確實性を證せられたが、これら三短冊に共通するものは後年のと著しい對比が感じられる。尤も熟視してをれば、自らにして一脈の連絡が見出されるのは當然だらうが、一見しただけでは變化が大き過ぎるほどであらう。而して若き時の鬼貫筆蹟中この「一夜菴筆海帳」の如きはその由來が正しいことは既述の通りであるから、將來に於ける研究に際しては決定的な資料として尊重せられるべきである。なほ從來珍襲せられて來た「筆海帳」の中から鬼貫短冊の撮影を許され且つ公表することを許諾して下さつた興昌寺に對して深謝の意を表する。

釋々哩

日和よし牛ハ野に寐て山櫻

佛見書

佛兄之印

鬼貫

肉太の大字を以て記された半切で、鬼貫獨自のものだ。句は「大悟物狂」に「日和よし牛は野に寐て山ざくら」とあるから、同書刊行の元祿三年五月以前の吟だが、「佛兄七車」には多田の院へまゐりける道のほとりにて

日和よし牛ハ野に寐て山櫻

と詞書を備へて掲出され、句の作られた事情もはつきりする。但し佛兄の號を以て署名するから、揮毫の年時は元祿十一年頃まで降つて來る必要がある。現在は伊豆伊東寺島重太郎氏が藏せられるが、熱海山本安三郎氏の舊藏であつた。この度本書に収録することを許された寺島氏、並に御韓旋を賜はつた山本翁に謝意を捧げる。

なほ本半切に用ひられた鬼貫印は面白いもので、ここに凸版として掲出することにした。これを見ると、蛇といふか龍といふか、とにかくさういふもの



を以て鬼貫の二字を作つてある、さうしてここで思ひ出されることは、『鬼貫發句集』の嘯山文中に載る鬼貫蛇嫌ひの話だつた。何れにせよ印としては妙といふべく、旁々如何にも鬼貫らしい面目の一端が窺へるだらう。

(註) 眞蹟短冊には次のやうにある。

元祿三庚午のとし 春雨のけふ斗とて降にけり 鬼 貫
彌生晦日の雨を

鬼 貫 略 年 譜

本年譜は一卷讀過に際して多少の参考にもなればと思つて作つたが、多くは書中の事實を年代順に並べたのに過ぎず、特に詳細なることを努めなかつた。

寛文元年 (皇紀二三三二一) 一歳

四月四日 鬼貫伊丹に生る、上島氏かみじま、後ち平泉姓を用ふ、

寛文八年 (二三三二八) 八歳

「來い〜といへど螢がとんでゆく」の吟を以て人々を驚かす、

寛文十三年 (二三三三三) 十三歳

延寶元年 (二三三三三)
維舟門に入る、

延寶二年 (二三三四) 十四歳

宗旦、伊丹に移る、

延寶四年 (二三三三六) 十六歳

宗因門となる、

三月中旬維舟撰『武藏野』刊、霜月十八日季吟撰『續連珠』刊、集中の龜丸・龜松丸は鬼貫の前號か、

延寶五年 (二三三七) 十七歳

『當流籠拔』刊行に著手、

延寶六年 (二三三八) 十八歳

霜月『當流籠拔』刊、

延寶八年 (二三四〇) 廿歳

六月廿九日 維舟歿、七十九歳、

『慧能録』『無分別、追加親仁異見』刊(共に未見)、

延寶九年 (二三四一) 廿一歳

天和元年 (二三四二) 廿一歳

この頃より懊惱始まる、

天和二年 (二三四二) 廿二歳

『西瓜三ツ』刊(未見)、惟中撰『一夜庵建立縁起』刊、

三月廿八日 宗因歿、七十八歳、

貞享元年 (二三四四) 廿四歳

『有馬日書』『かやうニハものハ』刊(共に未見)、

貞享二年 (二三四五) 廿五歳

春、「誠の外に俳諧無し」と大悟す、

この頃より上阪し勉學中か、春芭蕉と面接か(『四山集』により推察)

『三人蛸』刊(未見)、

貞享三年 (二三四六) 廿六歳

三月下旬西吟『庵櫻』成る、當時歸郷し、百丸と共に西吟訪問か、

季夏東武に赴き、七月難波に歸る、

七月晦日 鸞動歿、廿二歳、

貞享四年 (二三四七) 廿七歳

五月廿一日 三池侯に出仕(上島系圖)、

蘭秋鸞動追善集『野梅集』刊、

貞享五年 (二三四八) 廿八歳

元祿元年 「大坂辰歳旦惣寄」に出句、

元祿二年 (二三四九) 廿九歳

九月廿七日 三池を辭す(上島系圖)、

十月十日 鐵卵歿、廿八歳、

元祿三年 (二三五〇) 卅歳

二月十日 鐵卵懷舊の百韻興行、西鶴・才麿・來山等一座、

五月『大悟物狂』刊、

八月十日 福嶋村に移居、

九月十日 之道(諷竹)の幻住庵に芭蕉を訪ふを送る、

九月廿日より「禁足之旅記」をなす、

十月『犬居士』刊、

元祿四年 (二三五一) 卅一歳

六月五日 郡山侯に出仕(上島系圖)、

八月八日 父宗春歿、八十八歳、

元祿五年 (二三五二) 卅二歳

二月「はじめて和州郡山の二月にむかふ」句あり「君が地の花のつぼミを見初けり」

(『佛の兄』)、

中夏『伊丹生誹諧』刊、

季夏、月尋撰『誹諧高砂子集』に序を贈る、署名「堀川の馬樂堂」、

『食』刊、

元祿六年 (二三五三) 卅三歳

八月廿三日 鬼貫次兄方副歿(上島系圖)、

九月十七日 宗旦歿五十八歳、

元祿七年 (二三五四) 卅四歳

八月十五日 病後月見「しミ」と立て見にけりけふの月」(『佛の兄』)

十月十一日 芭蕉難波にて歿、五十一歳、

元祿八年 (二三五五) 卅五歳

正月十九日 骸骨を乞ひて郡山を去る（上島系圖）、
永太郎生る、

元祿九年（二三五六）卅六歳、

猪名野の古郷に年を迎ふ、

中秋『古藏集』刊、伊丹派の人々を難ず、

元祿十一年（二三五八）卅八歳

中冬『佛の兄』自序、

元祿十二年（二三五九）卅九歳

正月『佛の兄』刊、

元祿十三年（二三六〇）四十歳

永太郎歿、六歳、

元祿十四年（二三六一）四十一歳

舍羅撰『荒小田』に跋を贈る、

二月 惟然、鬼貫を訪ふ、

元祿十五年（二三六二）四十二歳

三月『花見車』刊、津の國鬼貫の條に「大名もどり也。まだ一かせぎのぞんでゐさんす
ゆへ、流れの身ともなられず、風俗は太夫にしても恥かしからず。」

秋、惟然再び鬼貫を伊丹に訪ふ、

元祿十六年（二三六三）四十三歳

『酸鼻集』刊、

二月二日 上洛、

三月 芦笛『塵の香』刊、才麿序を與ふ、

三月一日 上洛の大久保道古を母と共に案内し高臺寺に赴く、

八月五日 母歿、

蘭秋月尋撰『とてしも』刊、

元祿十七年（二三六三）四十三歳

寶永元年 西吟『宇津不之曾女』刊、

寶永二年（二三六四）四十四歳

夏 支考・座神共撰「すの字」に跋を與へ、支考の伊丹行を送る、
宗且十三回忌追善集「逃げていにけり」刊、

寶永三年 (二三六五) 四十五歳

三月 於洛東双林寺支考主催芭蕉十三回忌の俳席に出座、「かけまはる夢や焼野の風の
音」、

寶永四年 (二三六六) 四十六歳

道古『古今導引集』成る、

寶永六年 (二三六九) 四十九歳

『すねあげよ』刊(未見)

三月廿八日 西吟歿、

寶永七年 (二三七〇) 五十歳

睦月 鷄賀撰『何の姿』に序す、

「正月十日の夜、東山院御葬禮を拜ミ奉りて、御車ハ闇の月夜はなく音哉」(『佛兄七
車』)

正徳二年 (二三七二) 五十二歳

五月十三日 蟻道歿、四十八歳、

五月中旬 蟻道追善集「鉢扣」刊、

正徳三年 (二三七三) 五十三歳

九月 仲策『導引口訣集』刊、

正徳四年 (二三七四) 五十四歳

月尋撰才鷹判詞「伊丹發句合」成る、鬼貫跋、

九月八日 江戸に下り、大晦日神の道について傳授を受く、

正徳五年 (二三七五) 五十五歳

二月廿一日 月尋歿、

秋 歸洛

正徳六年 (二三七六) 五十六歳

享保元年 春紫野大心和尙六十の賀に句を贈る、

十月三日 小西來山歿、六十三歳、

享保二年 (二三七七) 五十七歳

十一月淡々『にハくなぶり』刊、鬼貫版下を記す、

來山追善集『木葉古満』『遠千鳥』刊、後者に跋文を送る、

享保初年大阪に移る、

享保三年 (二三七八) 五十八歳

春の頃有賀長伯より俳諧歌傳授か、

中秋『獨言』刊、

享保八年 (二三八三) 六十三歳

この頃百丸の『在岡逸士傳』成るか、才麿序は享保七年、祇空序享保八年、淡々跋同年

享保九年 (二三八四) 六十四歳

三月廿一日大阪に大火あり、淨清月次の會止み、卯月の始より中旬迄伊丹に引越す(『佛

兄七車』)、

享保十二年 (二三八七) 六十七歳

春『佛兄七車』に自ら序す、

二月十六日 百丸歿、七十三歳、

享保十四年 (二三八九) 六十九歳

來山十三回忌集『たつか弓』刊、鬼貫跋、

享保十五年 (二三九〇) 七十歳

首夏 七十賀集『千歳眉壽冊』成る、

『獨言』の跋者大心義統和尚寂、七十四歳、

享保十七年 (二三九二) 七十二歳

雲鹿撰『名の兔』跋、

來山十七回忌集『誹諧葉久母里』刊、

享保十八年 (二三九三) 七十三歳

髪を下し即翁と號す、

享保十九年 (二三九四) 七十四歳

喜佐女追善集『捨火桶』刊、鬼貫句卷軸、

享保二十年 (二三九五) 七十五歳

歳旦吟集刊、貫衣・貫藤・鬼武の門弟名見ゆ、

布門撰「誹諧禪農能」に序、

元文二年 (二三九七) 七十七歳

六月二日 有賀長伯歿、七十七歳、

十一月 永井走帆追悼狂歌集「たねふくべ」に序(金花翁鬼貫)、

元文三年 (二三九八) 七十八歳

正月二日 才鷹歿、八十三歳、

八月二日 鬼貫歿「余波之喙、夢返せ鳥の覺す霧の月」

元文五年 (二四〇〇)

五月八日 青人歿、八十一歳、

季夏 追善集「月の月」刊、梅門撰、

延享元年 (二四〇四)

追善集「誹諧むな車」刊、李原撰、

寛延四年 (二四一一)

寶暦元年

涼帝(綾足)作「芭蕉翁頭陀物語」刊、鬼貫貧に迫り路通と共謀して芭蕉の偽筆を賣れり
といふ、

明和六年 (二四二九)

太祇「鬼貫句選」刊、蕪村跋、

安永八年 (二四三九)

文筆堂「鬼貫獨吟百韻」刊、

天明三年 (二四四三)

「鬼貫發句集」刊、嘯山の鬼貫評傳を添ふ、

天明七年 (二四四七)

「囉々哩居士五十年懷舊」成る、

享和二年 (二四六一)

文曉「俳諧芭蕉談」刊、鬼貫關係の記事をも收む、

索引

一、これは本文に出る人名・書名・地名を始め、件名乃至美的賓辭等を
集め、五十音順に並べたものであるが、發音的表記の方法を採らな
かつた。
二、例へば一―三の如く記されるのは、一頁二頁三頁に出ることを示し
てある。

- ア
- 奥儀抄 四〇三
 鷗鷗粒 三二 三三 三三
 赤人 二六 三五九
 秋山の記 一六
 阿賀 二六 一九五 一九六
 阿難軒 三七 四八 四九 三六 四三五
 東日記 一五〇
- 吾妻問答 四〇四
 あはれ 四二二 四二四
 あめ子 二七一 二八五
 新井彌兵衛 一九四
 有明濱 四三四 四三五 四三七
 有賀家の七部書 二〇三
 在岡逸士傳 三一五 七 一七 二二
 三 三九 三〇 三七 四二 四五 六二
 一一一 一一三 一四〇 一一三 一八 一五二
- 一五五 一六九 一八四 一九五 一九五
 二二二 二二九 二九二 二九八 三二二
 三五九―三六一 三六四 三六五 三六九 三七三
 三七六 四三六 四四一
 在岡年代秘記 九九
 有馬日書 三六 三七 四九 一六 一一九
 一三〇 一三九 三六〇
 蟻道 一 三一五 一六 一八 二四―二六 三〇
 九五 一一九 一三〇 一三三 一六五 一六八

- 二九八 三七一―三七九
 青木貞悟 三六五 三六七
 青房 二二 三五〇
 青人 一 一五 一五―一七 二二―二六
 三三 四二―四四 四八 九五 一一六 一一八
 一三〇―一三二 一六五 一七一 一七四
 一八五 二五四 二五五 三五九 三七二 四三八
 安靜 六
 按腹 八三 八四
 按腹圖解 七三 八二―八四
 按摩傳 八二
 按摩手引 八三 八三
- 一
 幽玄 三四 四二―四三 四九 四二
 幽齋 二〇〇 二〇二
 勢(句の) 三三 三五
 池禪尼 二三五
- 石田元季 一三八 三六〇
 醫心方 七三
 伊丹生誹語 二四 二八 一四〇 一三二
 伊丹酒壺五歌仙 二二 三三 一九五 三二三
 伊丹酒 二 三七三
 伊丹派 一六五
 伊丹誹語嵯峨竹の子 一七
 伊丹風 一 二五 八 一〇 一三―三四
 二六―三〇 三二 四四 四九 六八 一一七
 二二九 一二四 一三九 一五〇 二二二 二二三
 二四一 二九八 二九九 三二三 三三七 三六九
 三九二 三九五 四二〇 四四二
 伊丹風俗 一六
 伊丹風俳諧全集 二九 一七五 二一九 三九九
 伊丹風流 二二六
 伊丹發句合 二九九 三六三 三六五―三六七
 伊丹謠白 二
 伊丹流 一五
- 一有 三四
 一砂 四三五
 一品 五
 一勝 六
 一笑 二七七
 一樽 二二五
 一友 三六一
 一時流行 四一四
 一桃 一九
 偽 一三 四二 三六六 三八七 四〇〇
 一博 二二〇 四三八
 一夜菴建立緣起 四三九
 一夜菴筆海帳 四八 四三四 四三五 四四二
 一路 二六
 和泉三郎忠衡 二二三
 印南野 三五三
 犬居士 三七 九四 九六 一〇八 一一一
 一六 一一九 一三〇 一三三 一三九 一三五

一四三 一四四 一五四 一五七 一五八 一六一
 一六四 一七四 二五五—二五七 二六九 二七三
 二七六 二八四 二九〇—二九四 三〇五 三三六
 三五四 三五六 三六〇 三六一 三八五
 犬筑波 四二〇
 犬丸 一五七
 いねあげよ 一六 一三一
 庵櫻 五〇 五四 五七 五八 六〇 六一 六四
 六五 六八 七七 九四 三〇六 三六〇
 今宮草 三四九 三五三

上田秋成全集 一〇八
 梅の紅 三三三
 雲竹 三三三
 詠歌大概 四〇八
 詠歌大木秘訣 三〇〇
 榮花物語 七三 七五
 永平廣録 六四
 妖艶 四一九 四二一
 益軒 七三 七四 七九
 江口 四六
 延俊 六
 江戸文學研究 三二四
 江戸兩吟集 三三九
 翁(謡曲) 三六〇

翁草 一八六 一九一
 沖見 二 三一 三三 三七 三八
 奥の細道 一〇七 二八五 三〇六 四〇〇 四三三
 億曆 四
 乙州 三〇〇
 鬼明 二九九
 鬼篤 二九九
 鬼貫句選 六七 八六 一三三 一四二 一四四
 二一五 二二〇 二二三 二四六 二五〇
 三二四 三五七 四三三
 鬼貫獨吟百韻 一六 一三三 二二五 二三四
 三六三
 鬼貫發句集 四一六 八八 八八 一一五 一四四
 二二五 二二〇—二三三 二二六 二二三 二六四
 三〇八 三二四 三三五 三六三 三五八 三七六
 四四三
 鬼農目 四八 一一九 三五六
 笈日記 三〇〇 三一一

笈の小文 二四六 二七六 三〇六
 鬼冬 二九九
 鬼之 三七四 三七五
 大井川集 六 四八
 大江ノ圖幸鬼貫 三五五
 大江朝綱 一六六
 大久保道古 七五 七七—七九 八一 八五
 八八 九五—九九 一〇七 三七四
 大坂辰歳日惣寄 一七三 三四三 三六〇
 大坂談林 三五三
 太田晋齋 七三 八四
 大原翼 八六
 親父異見 六八 二二五 二二八 二三〇 二四三

好春 四三 四四
 好昌 六一 一六 四三八
 江宅 二
 校本大筑波集 四三七
 行餘醫言 八三
 香河脩徳子 八二 八三
 賀川子啓子 八二—八四
 賀川子玄 八四
 鶴林玉露 三五三
 陽炎集 三三六 三三七
 籠拔 八
 柏屋安兵衛 一八二
 勝秀 六
 鹿子の渡 三一九 三三〇
 彼岸 一九五 一九六
 蛙合 三四五 三七〇
 蛙句集 二七六
 河東碧梧桐 三〇〇

貝おほひ 一九 二三六 二四九 二六六 二七四
 二九五 四〇〇
 上方 四四 九九 三五九
 神澤社口 一八九—一九三
 上嶋 二二三
 上島采圖 四三 九三 二二二 二三四 二五〇—
 二五二 二五四—二五七 二六〇 三五五
 上島與惣兵衛 九九 三五四
 龜松丸 六 四二—四四 三五四
 龜丸 六 四二 四四 四五 三五四
 かやうニゆものハ 二一六 二一八 二一九
 二四三
 烏丸光榮 四一八
 からび 一八
 からびて細く 一九
 雁金屋庄兵衛 一六四
 輕み 三四 三三〇 三三一
 枯尾華 三〇〇 三一一 三二五
 漢學者傳記集成 四二六

岩籟 一六
閑窓一得 一六六
刊本七車 一三三
閑立和尙 六九

キ

嬉遊笑覽 七三
舊德 一三三
牛刀 一九三
其角 二四 二六 三一 三九 四五 四六 一〇一
一四一 一六〇 一九四 二二九 二四〇 三〇一
三一一 三三五 四二六
其角十七回 三七三 四二六
季吟 六 四三 五四 二三四—二五六 二九五
四〇一 四三四 四三五
菊院 二
紙空 三四 一八二 一八五 四三六
菊花九唱 二九三

儀左衛門命清 二三五

菊叟 一七四 一七五 一七七
菊谷三惟 一四 一七四—一七七
菊治 九七
菊の香 三〇二
菊舎太兵衛 三二六
菊屋安兵衛 三三五
其冠 二九八
机月 二五一
氣先 三七 三八 三三〇 三三八
喜佐女 二七七
象山陰 二二
喜多村利且 七五
北の山 三三三
義竹 一六一 一六二
几董 三三七
及瓜 九〇
きれく 三三九 三三一

狂句 一五〇

狂句作意 一七 二八 四七 五五 五六 六四
六八 一三三 一三六 一三九 一四三 一四四
三八三 四一一
狂言 三九五
京極黃門 一〇九
京羽二重 三〇三
玉海集 五二
玉海集追加 五
曲亭漫筆 一〇〇
虛實 三九八 四二二
虛風 二二八 一四七 一四八
巨璞堂 一九五
巨妙子蓮童 二〇三
去來抄 三〇—三三 三四 三五 一四一 二七〇
二八七 三〇〇 三〇二 三三四—三三六 三三〇
三四〇 三四三 四一三 四二四 四二七 四三九
去來抄 三〇—三三 四六 四七 一九八 二七一

許六 一四四 一四七 一四九 一七三 三〇〇 三〇二
三二四 三五三 四一一 四三〇
鬼拉體 三五七 三五八
桐火桶 四〇四
俳諧金花傳 一四一 四三三
種(金)花翁 一六九 一九五 二三三 三〇九
三五四 三五五 三六二 三六四
金作 三三三
禁足之旅記 一四五 一四八 一五五 一五六
一六四 二二二 二八四 二九一 二九四 三〇五
三三六 三三七 三四六 三八二
近代秀歌 四〇八
公任 三〇一
琴風 一九
金毛 九五
銀童 二九八

句合 二九五
ク

ケ

寓言 二九 三六 二四一 三九五
空道和尙 六九 一三九
救済 二七六
葉喰 二一八
九間 一八九
花月六百韻 一九二 一九三
華(元)陀五高法 七三 七五 八九
快圓律師 二〇四
黄山谷 三四〇 四〇八
貫千 二九九
鶏賀 九九 一〇〇 二〇三 二九七 三七三
鶏松堂桃貫 三五七 三六三
景桃 三三四
契沖 三九九 三六五
月尋 二六 一六七 二二九 三三三 三九—三二二
三三三 三三八 三五九

ク

月尋堂 三六五
毛吹草 一八三
けふの昔 三三三 四〇九
兼好 三〇〇 三一
元貫 二二六
源五右衛門 三三四
玄旨 三〇〇
源氏 三六五
幻住庵 一四九 二七三 二八二 二八四 二八五
幻住庵記 二五〇 二八五 四〇三
原水 一三三
玄卜 六三
玄養 五
功者の私意 三三八 四三三
狐海(界) 一五七 一五八 一六〇 一六五 二五九
二六〇

古今集 100 295 296 342 351
 358 400 404 407 424
 古今導引集 75 77 79 81 98
 古今短冊集 47 48
 古今養性錄 75
 國語・國文 49 194 354
 國文學の哲學的研究 418
 國歩 280
 國民性十論 67
 心 153 154 174 242-246 396
 397 403 404 406 408-412
 415 426 429
 御傘 183
 古事類苑 84
 菰洲 39 310
 後拾遺集 101
 兒島大主 308
 湖春 35

去年の枝折 108 161 163
 吾仲 380
 滑稽著聞集 376
 詞 245 246 380 396-400 403-
 406 408-412 415 417 426
 429
 後鳥羽上皇 18 431
 木葉古滿 353
 近衛家 29 374
 古俳書文庫 353
 五馬 308 309
 古梅園長江 180
 戀百韻 180-182 187 188 194
 古風 518 101 151 152 156 157
 224 237-239 294 413 414
 古文祇園會 118
 駒撮 350
 小町 180 189

崑山集 5 11
 言水 26 54 131 240 241 280
 301 370
 西鶴 13 128 244 245
 西行 10 160 231 245 246 247
 西吟 48 50 51-55 59 191 199
 宰陀稿本 279
 再呈落柿舎書 324 211 212
 才麿 30 31 34 211 212 218
 160 169 176 185 231 240
 241 299 301 313 315 365
 367-374
 西武 35
 柴門辭 391
 草庵集 331
 桑梓格 361

桑老父 370
 雙林寺 380
 榊原芳野 33
 鷺助 17 15 25-27 29 95
 118 212 213 216-218 268
 作意 345 411 412 416
 酒人 119 219
 さゝめこと 214
 座神 179 365 372
 佛兄 15 92 165 170-172 175
 232 354 361 382
 讚岐興昌寺 434
 さび 19 23
 雜談集 24 26 45 46 101 102
 372
 雜百韻 165 169 173-175 178
 181-185 188 194 294
 佐夜中山 235

養笠雨談 100 101 108 109
 猿蓑 270-272
 三友 6
 山家集 102
 三紀 16 8 25 26 28 118
 119 165
 三册子 134 199 244 304 305
 237 332 392 404-406 415
 422 429
 山柿の門 359
 卅里 158
 三重 6 42-44
 山晴 97 98
 三人蝟 15 49 116 118 119 242
 醜鼻集 96 116 123 195 290
 291
 杉風 34 198 239 240 302 407
 427 429

産論 84
 産論翼 81-84
 私意 39 341 415
 秋成遺文 110 161
 周伯 2
 舟伴 138
 柴英 326 327
 史英 160
 秋風 33 277
 子規 15
 四季辭 209
 重之 6
 重頼 24 15 23 186 235 236
 238
 支考 208 280 287 302 311 333
 368 373 430

市賣 一九五—一九七 二二五
 史幸 三三三
 四國猿 六四
 四山亭 二七五
 四山集 三三四 二八〇 三二四 三一九
 紫殘 二六—二九
 而笑堂 一九五
 止水 二七七
 似船 六一三
 只川 二二三
 之道 一五〇 二七一 二七二 二七五 二八五
 史談俳話 三三八
 七隱 二二
 室風 三五八
 志津屋敷 三四〇
 子姪に俳諧を禁する文 四一六
 信濃札 三五六
 芝柏 一六五 三〇五 三〇六

之白 二二六 三二六 三六六
 師走囊 一二三 一二四
 十萬堂 一四六 三四三 三四七 三五〇 三五三
 四副對 三〇六
 嶋家 二五三
 下嶋 二五三
 尙齋利春 七五
 正風 一〇九 二三二 二七七
 尙白 二八〇
 上手 五六 一三八 二二二 二八六 三九三
 淨春童子 三四九
 釋道契 二〇四
 釋尼理法 三四六
 酒堂 二八〇
 舍羅 一七六 三一九 三三八 四三五 四五六
 修行 三〇五 三〇六 三二二 三四三 三六六 三八七
 三九七 三九九 四二一 四二六
 朱拙 四〇九

酒粕 一六 二二 二二五 二二九
 壽齡苑 三〇八
 俊成 四二三 四三二
 春堂 二六 一八八 三三三
 初龍淵 二二五
 松雨 二二八
 松意 一五五 二三八
 松室春貞信女 一五五
 松聲 一〇〇
 初心 五六 六六 六七 三六七 三八八
 初中後 三六七
 如柳 三六三
 至樂 三四〇
 白玉椽 三六九
 しをり 一九 三三 一九八 三六六
 心敬 一四三 二一〇 二二四 二二五 三三一 四三二
 心敬僧都庭訓 三二四
 晋子 一八四 四二六

森之 三五二
 新撰俳諧年表 一一一
 新增大筑波 四二〇
 信德 三三一 三〇一

又

西瓜三ツ 二六 二八 二〇二 二四三
 水色 一八二 一九三
 吹田屋多四郎 二二二 二二三
 粹白 一七七
 隨流 九 一〇 一一 一二 一四
 妻(句の) 一三五 一五二 一五四 一七四 二四三
 二四四 二四三 三三三 三三六 四〇〇
 三四九 三八〇 三九七—三九九 四〇三 四〇四
 四〇八—四一一 四一五 四二二
 數寄 二〇六 二二二 三九七 三九六 四一七
 拾火桶 一七七 二三五
 砂燕 三三二

すの字 三四〇 三六八
 住吉詣 二五九
 住吉物語 三五

セ

正雅 二〇〇
 井車 一九九 二八八
 醒世子 一〇一 一〇三
 青流 三四 三五 四三六 四四〇
 嘯山 六六 六七 八五—八八 九二 九四 一四〇
 一四二 二二三 二二七 二六四 二六五
 二六七 二六八 二七三 三〇七 三五七 三七六
 三八二 四四五
 小心子 二〇三
 小兒導引撮要 七六
 蕉風 一五 一七 一九 二〇 二九 三九 四七
 八六 一一〇 二〇五 二七六 二七七 二七八
 二八六 三〇二 三三四 三三六 三七九 四〇四

蕉門 一四 一四一—一七六 二〇七 二二三 二三七
 二四〇 二六七 二六八 二七三 二七六 二七九
 二八〇 二八二 三三三 三三四 三六八 四二七
 蕉門略系譜草藥 一七七
 石橋 二四 一七四 一七五
 石壽堂 一九五
 雪舟 二四五
 設叢大全 一一四
 瀨尾源兵衛 七五
 仙鶴 一八二 一八五
 千及 一二三 一九五 二九八 三二五
 蟬吟 二三四 二四九 二六四
 前後日記 三〇〇
 千載集 三〇一
 千載堂丈石 一九五
 千歲不易 四一四

千歲眉壽册 一〇五 一一七 一二一—一二三
 二二七 二三四 二三五 三六三
 千山 三一九 三三〇
 先師評 三三四
 泉石 三四八
 千代萩 三五五
 沾德 一九四 二二二
 千那 二八〇
 千梅 一七六
 千百 一九五
 禪 六七七〇 三四七

宗鑑 二六 二九 四八 一四四 一六九 二二一
 二三八 四三〇 四三四 四三六—四四一
 宗祇 一一〇 二〇四 二二四 二二五 二二二 二四三
 二四五 三六七 三九三 四〇四 四二九
 贈其角先生書 三〇二
 叢桂亭醫事小言 八四
 宗純 六一
 宗嗣 四三九
 宗且 一四—九 一三—三 三〇 六三 六八
 一五 一六 一八 一九 二七 一六五
 二五七 三六九 四三六—四三八
 宗長 二〇四 二二四 三九三
 惣本寺高政 一五五
 宗也 三五五
 贈落柿舎去來書 三三四
 宋屋 八六 三二七
 素牛 三三三 三三四 三三九
 續有磯海 二七九

續今宮草 九六 三四五—三四九 三五三 三五六
 續群書類從 二二〇
 續五論 四三〇
 續日本高僧傳 二〇四
 續三十幅 一六五
 續虛栗 三四五
 足力 七三
 續連珠 六 四三—四四
 素外 三七六 三七七
 素丸 一一四
 即翁 三五四 三六二 三六三
 素堂 三〇—三三 三三九 三四五 三〇二
 素能 三八二
 其こがらし 三二六 三二九 三三一
 其袋 二二八 一五一 二九二 二九三
 其法師 一五八
 素白 三一五 三一八
 曾良 三〇六

ソ

宋阿 三二七
 宗因 一六七 三三三 三九 四二 四六 五三
 八六 一一〇 一一一 一二四 一三三 一五七
 二五七—二五九 二四一 二七〇 三四五 三八一
 四〇一 四〇四 四〇七 四一九 四三〇 四三四

大心義統 二〇三 二〇四
 大心和尙 七〇
 大日本國語辭典 七二
 大日本地名辭書 二五三
 大日本佛教全書 二〇四
 大寶令 七一 七六
 導引 五七 五八 七〇—七五 七六—八三 八五
 八七—九四 九六 九八—一〇三 一〇五—一〇七
 一一一 一六一 一九〇 一九二 一九九 二五〇
 二五八 二六三 二八九 三〇七 三〇八 三二六
 三七一 三七四 四三三
 導引口訣鈔 七五 七九 八一—八三 八九
 道古 八一 八五 八八 九五—九九 一〇七
 道元 六四
 導引體要 七五—七七 八九 九二
 導引秘傳抄 八三
 桃青 三三 三三八 三三九 二六四 二六五 三三二
 桃青門弟獨吟廿歌仙 三三九

當風 七 一〇 三六 二一三 二二七—二二九
 三四三 四一三
 當流 七八 一五 四九 一三一 二九九
 當流龍拔 七八 一三 二二 四二 四四 四五
 六七 一一五 一一八 一一九 一四〇 一三三
 一一四 一二七 二二九 二四二 三五五
 高井立志 一六〇 二五八 二五九
 高橋德恒 三三三 三三三
 高森正因 三七八
 濁水 二六 一一五 一一九 四三八
 卓々 一九三
 竹内惟庸 三六五
 竹中通卷 七五
 竹松丸 六 四三—四四
 蛸久 三 二二 三三
 立花主膳正藤原種明 二五〇
 橘屋治兵衛 四三二
 たつか弓 三四七 三五一

徂徠 二一六
 素龍 一四九 一五〇
 太紙 八六 三二二 三三三 三五七 三五八
 内經 七〇
 大言海 七三 七三
 大元式 二二九
 大悟 四一〇 四一八 四二八
 大悟物狂 四三 五五 五九 六〇 一〇七 一一六
 一一九—一二二 一二三—一二五 一二九 一三七—
 一四三 一四九 一五一 一六九 一七〇 一七四
 一七八 一七九 二二六 二二九 二三〇 二四八
 二五三—二五六 二六九 二七六 二八〇 二九八
 三〇三—三〇五 三三四—三三六 三三九 三四一
 三五六 三六〇 三六九 三八四 三九二 四二二
 四三三 四四二
 大黒屋庄兵衛 三二五

大心義統 二〇三 二〇四
 大心和尙 七〇
 大日本國語辭典 七二
 大日本地名辭書 二五三
 大日本佛教全書 二〇四
 大寶令 七一 七六
 導引 五七 五八 七〇—七五 七六—八三 八五
 八七—九四 九六 九八—一〇三 一〇五—一〇七
 一一一 一六一 一九〇 一九二 一九九 二五〇
 二五八 二六三 二八九 三〇七 三〇八 三二六
 三七一 三七四 四三三
 導引口訣鈔 七五 七九 八一—八三 八九
 道古 八一 八五 八八 九五—九九 一〇七
 道元 六四
 導引體要 七五—七七 八九 九二
 導引秘傳抄 八三
 桃青 三三 三三八 三三九 二六四 二六五 三三二
 桃青門弟獨吟廿歌仙 三三九

當風 七 一〇 三六 二一三 二二七—二二九
 三四三 四一三
 當流 七八 一五 四九 一三一 二九九
 當流龍拔 七八 一三 二二 四二 四四 四五
 六七 一一五 一一八 一一九 一四〇 一三三
 一一四 一二七 二二九 二四二 三五五
 高井立志 一六〇 二五八 二五九
 高橋德恒 三三三 三三三
 高森正因 三七八
 濁水 二六 一一五 一一九 四三八
 卓々 一九三
 竹内惟庸 三六五
 竹中通卷 七五
 竹松丸 六 四三—四四
 蛸久 三 二二 三三
 立花主膳正藤原種明 二五〇
 橘屋治兵衛 四三二
 たつか弓 三四七 三五一

田中常矩 一三三
 たねふくへ 一〇六、一三四
 平宗清 三三三
 答許子問難辨 三四一、三四七、三四〇
 爲有 三九
 達磨大師導引法 八九
 洪翁吟稿 三四六
 且海 三一九
 淡齋 三二六、三二九、三三〇
 斷層 三五五
 淡々 三二、一八〇—一九二、一九四、三七一—三七四
 四三五、四三六
 淡々翁三回忌 一八一
 丹野 一六五
 談(檀)林 一七九、一四一、一五八、二〇〇
 三三、三九、四六、八六、一〇九、一一四、一一三
 一五五、一五九、二二一、二二三、二三七—二四一
 二七二、二七四、二九四、三三四、三五六、三四五

談林十百韻 三三八
 知及 三三三
 知牛 一六五、三三八、三二二、三二七—三二八
 竹韻和尚 一六〇
 竹瓦樓句鈔 三三五
 智月尼 二七九
 竹二坊 三三五
 竹人 二六四、二六六
 千邊之比登邊 八四
 長雅 一〇〇、一〇三、一〇四
 長孝 二一〇、二〇三
 丈臥 一〇八、一七三、二三四、三三三、三三九
 三三〇、三三四、三三二
 貞享五年歲旦帖 一七
 丈草 二八二、二八四、三三四

長室 六、四三八
 長舎 六一七
 長宅 三六、二二
 長頭丸 五
 長伯 七〇、一九五、一九八—二〇〇、二〇三—二〇五
 二二五、四一八—四二〇
 長父 三、四、二二、三三
 長發句 一四、一五、二七、四八、六三、三九五
 長明 七
 長屋 三六
 茶屋與次兵衛 二七九
 重紀 五
 芋狐 三四八
 著作堂一夕話 一〇〇
 千里 八
 麿の香 三〇
 珍舎 一八三
 麿々塙正月堂 八九、一一三、二二五

ツ

通俗誌 一一三
 月の月 八八、八九、九二、一〇五、一〇八、一一一
 一一七、一二九、一六九、一七七、一八一、一八二
 一八七、二三四、二五三、二五二、二八八
 三〇九、三五七、三九八、三六二、三六三、三七二
 三八二
 菟玖波集 二七六
 筑波問答 七三
 續の原 一九
 土田杏村 四一八
 經信 二〇一
 綱彦 二二六
 貫之 一六三、三五八、三五九、三七一—三七九
 鶴の隣 三六五、三六六
 鶴秀 三、二二、三三
 鶴松 四三

テ

徒然草 三六五
 定友 六、四三八、四四一
 定家 二四五、四〇四、四〇八、四二二、四二六
 貞峨 三六三
 貞岑 五
 貞喜 六
 貞室 五、二二、一六五、一六八
 貞則 六
 貞林 六
 鳥落人 三二六、三三三
 調和 三三一
 鐵幽 八九、四三、四三八、四四一
 鐵砂 四三五
 鐵士 三三、二八〇
 鐵卵 一三五、四二、六八、一二七、二二八
 一六五、二三四、二九八、三六九

蝶夢 二二三、二三五、二六六
 寺島の記 九六、三七四
 寺島良安 七三、九七
 天垂 一六五、一七六
 點也 三五四、三六〇、三六一
 天倫宗忽 二〇三、二〇四
 天嶺 三三三
 東海道名所記 一五三
 燈外 一四九、一五〇、二六九
 藤九郎次半藏 二三四
 東湖 二六九、二七一
 東行 三七〇
 澄相公 七八一—八〇、八五、八八
 藤堂主計良忠 三三四、三六四
 東坡 一八四、三三〇
 東門 八四

同門評 三三〇 三三〇
 徳 一三七 二四八
 徳七 三二二
 常盤屋句合 二五〇 二四〇
 とてしも 三二五 三二九 三二八—三三〇 三三三
 三六六
 杜若 一五九
 杜甫 三九 一〇八 二四〇 二四四
 遠千鳥 一七八 三五二 三五二
 遠山鳥 四五
 徳元 四〇四
 土芳 一九 一三四 一九九 二四四 二四五 三〇二
 三二七 三二八 四〇四 四〇五 四〇七 四一一
 四一五 四二二 四二九
 杜律 一〇九

中西卯兵衛 一九四
 永井走帆 三六四
 七車 三〇—三三三 三二六
 何の姿 一八 一八〇 二二九 二九九 三六
 名の兎 三六三
 直宗 三三三
 南無庵 二七五
 生川春明 三
 成(鳴)嶋錦江 四一六 四一七 四二〇
 南岳悦山和尚 三四七
 二
 二えふ(葉集) 四一 三二—三三四 三二七
 三二八 三四〇 三六六
 逸亭伊丹希季 二二五
 二條派 三〇三
 にハくなぶり 一六八 一八〇—一八二 一八五—
 一八八 一九二 一九四 三七一

句 二八六
 日本行脚文集 三四五
 日本醫學史 七三 七五
 如意寶珠 六一 一三
 如泉 五四
 によつぱり 二二六 二三〇
 又
 ぬけ句 三三五
 能因 四五
 野口在色 三七四 三七五
 野晒紀行 三五 二四五 二四七 二七六 三〇六
 野田忠禰 三五九 三六五
 後村 三二
 信房 五六

永田調兵衛 七九

ナ

馬櫻 三二六 二七 六八 一一九 一五〇
 俳家大系圖 三三 三七 一五七 三五五 三五六
 三六〇 三六二
 俳語合 一九 二四〇 四四五 三三 三三
 俳語生駒堂 二 二五五 二三四 二六九 二七一
 三四六
 俳語糸切齒 二四 一七四 一七六 一七七
 俳語埋木 四〇二
 俳語歌 二〇〇—二〇二
 俳語解脱抄 三七四
 俳語家譜 一九五—一九七
 俳語古選 八六 二四二
 俳語猿轡 九 二四
 俳語史の研究 二三八
 俳語史論考 一九四
 俳語十論 三三三

俳語初學抄 四〇四 四三〇
 俳語書籍目録 三七 四八 一一九 四三五
 俳語高砂子集 一五六 一六六 二四八 二五八
 三六一 三六四 三六八 四一五
 俳語團袋 二六 一三五 三〇三 三三五
 俳語著聞集 三七六
 俳語七ぐるま 三三〇
 俳語難波願禮 一五七 二二九 二六〇 三三八
 俳語の國 二四二
 俳語葉久母里 三五〇 三五二
 俳語百一集 四三二
 俳語胸車 二二 一一七 一三八 一九九 二二二
 二六八 二七八 二九九 三〇三 三五七 三六三
 俳語名作集 三四四
 俳語問答 二四三 二七一
 俳句研究 一七六 二九六
 俳句分類 一五
 俳人鬼貫附鬼貫句集 二四

俳人鬼貫の研究 二五二 二五二
 俳道盤石録 二一八
 俳道慧能録 二一九
 俳論 一五 一六 二二 四八 四九 一九 一九九
 三四三
 梅翁 一五 二七 二九 三六 四九 五三 一三三
 一六八 二三七 二三八 三四五 三七四 三八二
 四〇四 四三四 四三五 四三九 四四〇 四四一
 梅花佛 三二六 三三三 三四一
 梅谷 四三六 四三七 四四〇 四四一
 梅門 八八 八九 一〇六 一一—二四 一八一
 二五三 二九七 三七一
 梅隴 一九三
 馬琴 一〇〇 一〇一 一〇三
 白鷗堂 三七三
 柏喜 九七
 麥秀 二二
 泊船集 二七九

白樂天 二四四
 白露 一五 一三九 一四〇 三四三
 破邪顯正返答 九 一一
 馬上集 二二四
 巴人 三三
 巴水 二七四—二七七 二八二
 芭蕉 一四 一五 一八 一九 二二 二四 二七
 三〇—三三 三九 四六 四七 六八 七〇
 一〇六—一一 一一三 一一四 一一三—一一四
 一四三 一四九 一五〇 一五九 一六〇
 一六二 一六五 一六八 一七六 一七七 一九二
 一九七—一九九 二一九 二二〇 二二六 二二七
 二三〇—二三六 二三八—二四一 二四四—二四七
 二四九 二五〇 二六二—二六八 二七〇—二七四
 二七六—二八二 二八五—二八七 二九四—二九八
 三〇〇—三〇六 三二〇 三二一 三二二—三三四
 三三八—三四二 三五五 三五六 三七〇 三七六
 三七九 三八四 三八七 三八八 三九一
 芭蕉庵小文庫 二七九
 芭蕉句集 二九六
 芭蕉研究 四九
 芭蕉研究 二九六
 芭蕉談 二八二 二八五 二八七
 芭蕉翁 二七一 二八一 三三五 四〇五
 芭蕉翁行狀記 三二〇
 芭蕉翁全傳 二三五 二六四 二六六 二七六
 芭蕉翁頭陀物語 一〇五
 芭蕉翁反故文 二八七
 芭蕉翁繪詞傳 二五三 二五四
 破竹 三五三
 鉢扣 一八 二二 三三 三〇 三二 三九八
 八段錦 八九
 蜂房 一五 一六 二二 三三 三六九
 初懷紙 二二六
 初懷紙自註 二四五
 服部元喬 一六六
 花の雪 三二九 三四〇
 はなひ草 一八三
 花見車 四八 一一八 一五七 三二二 三二九
 花人ち 三三
 馬場氏 三三三 三三三
 林正且 七五
 馬樂童(堂) 一五七 一六五 二五八 二五九
 三五四 三六一
 腹とり 七三 七三
 婆羅門導引 七五 八九
 春澄 二八〇
 治房 四三 四四 三五五
 牛隱 一六五
 鯉谷 三六一

伴自 二五九 三五三
 半時庵 一八一 一八三 三三三
 盤水 一四六
 繁田常收 一〇〇
 萬代不易 一九九 四一四
 七
 冷えさび 一八 二七三
 東區史 二二五
 東山天皇 二〇九 二一〇
 東山萬句 三六八
 樋口功 二二五 二九七
 聖壽 一九八 四〇七 四二七
 秀衡 二二三
 人角 三 九五 一一九 三三三
 人丸 一六〇 三五九 四〇〇
 獨言 一四 一八 三六 三七 四〇 四二 四七
 五七 七〇 一〇五 一〇六 一〇七 一〇八 一〇九 一一〇 一一一
 一三三 一三四 一三七 一三九 一四一 一五七
 一六九 一七八 一七九 一八一 一八八 一九一
 一九四 一九七 二〇〇 二〇四 二〇五 二〇七
 二〇八 二一一—二一五 二二七 二三八 二四一
 二四三 二四五 二四八 三四一 三五二 三七八
 一三九〇 三九三 四〇一 四〇三 四〇六 四〇八
 四二二 四一九—四二二 四二三 四二五 四三〇
 四三三
 ひとり言 二二〇—二二五
 一言芳談 二二五 三〇三
 氷花 三七四 三七五
 響 二八六
 百花譜 二〇七
 百鳥譜 二〇八
 百九 一 三五 八 九 一五 二二 二四
 二六 三三 三七 三九 五〇—五五 六八
 九五 一〇〇 一一五 一二六 一三八 一二〇
 一五一 一六五 一六九 一八二—一八八 一九三
 ひとり言 二二〇—二二五
 一言芳談 二二五 三〇三
 氷花 三七四 三七五
 響 二八六
 百花譜 二〇七
 百鳥譜 二〇八
 百九 一 三五 八 九 一五 二二 二四
 二六 三三 三七 三九 五〇—五五 六八
 九五 一〇〇 一一五 一二六 一三八 一二〇
 一五一 一六五 一六九 一八二—一八八 一九三
 風雅 二四四 四〇五 四一六—四一八
 風雅の乞食 三〇六 三〇七
 風雅の誠 一九九 二四五 二六五 三〇三 三四一
 三八八 四一四 四二二 四二三 四三〇 四三九
 風雅の道 三四三
 平泉 一七四 二二三 二五五 二五〇
 平泉右膳 二五三
 平泉家 九三 二五七
 平泉立節 二五三
 平瀨四郎左衛門 二二四
 廣川氏 八二
 貧交行 三九
 七
 風雅 二四四 四〇五 四一六—四一八
 風雅の乞食 三〇六 三〇七
 風雅の誠 一九九 二四五 二六五 三〇三 三四一
 三八八 四一四 四二二 四二三 四三〇 四三九
 風雅の道 三四三

風狂 一三 二六 一三九 一五四 三三三 三三五
風光集 九五
風國 二七九
風竹 一六五 一七六 二六九 二七一 二七三 二八〇
風羅坊 三二六
不易 七〇 一三三 一六〇 一九六 一九八 二四四
不易の句 四一三 四一四
不易流行 一九八 一九九 二七三 三四一 三四二
深川 一〇〇
不堪 二二二
腹診書 八三
福富草紙 七五
袋洗 二
不玉 三三四

房齋 八八 八九 一一一 一二三 一七二
富士川游 七三
富士谷御杖 四三三
蕪村 一〇 一一一 一一三
藤の實 三三三 三三五
藤林良伯 八三
佛兄七車 二 四 一八 三六 四〇 四一 四九
五六 五七 五九 六一 六四 六五 六七
九四 九六 九八 一〇〇 一〇七 一一五 一二七
一三〇 一三三 一三五 一三八 一二九 一三三
一三六 一四三 一五三 一五五 一五七 一六四
一六七 一六九 一七八 一八〇 一九九 一九五
一九六 二〇〇 二〇三 二〇五 二〇九 二二五
二二八 二三〇 二三四 二二六 二二八 二二九
二三四 二三六 二五三 二五五 二五七 二六一
二六五 二六八 二七二 二七八 二八〇 二九二
三〇四 三〇五 三〇七 三一 三一六 三二九
三三〇 三三八 三四〇 三四六 三四九 三五三

佛敎大辭彙 三八
佛敎大辭典 二〇五
佛頂 一〇九
富天 三六三
太く遣し 一 一七 一九 三三 二八 六三
太み 一九
夫木抄 四〇一 四〇二
史邦 二七九
布門 二九九 三五二 三七〇 三七二 三七七
古藏集 三三 三四 二七 二八 三一 三三 三五
一一一
文雅 一九五
文量 一三三 一三三 二二五
分外 二二七
文藝類考 三三
文腕 二八二 二八五 二八七

文肯舎修古 一八三
文十 一四七 一四八 一五一
扁鵲 七八 八〇
飄海(界) 一三八 一四九 一五七 一五九
飄水 三〇八
飄叟 一四五
下手 一三一 一二二 一五九
別座鋪 三四
水
鳳似 三三四 三三九
鳳林寺 三三三 三六三
北枝 二八〇
卜尺 二五九
最樂寺 三六三 四三四
暮四 一九五 一九六

細み 一八 一九 三三
發句翁 二七五 二七六 二七九
勃窣翁 一八二 一八六
補天 一三六
佛の兄 九九 九三 一六 一九 一三三 一三九
一三六 一六四 一六五 一六九 一七五 一七八
一七九 一八二 一八三 二二六 二五三 二五八
二六〇 二六一 二九〇 二九一 二九四 三三三
三三五 三六一 三六三 三八五
想河院百首 一六六
本草綱目 三二五 三二六
本多下野守藤原忠平 二五〇
盆且 一一八
本朝文選 二〇七 二〇九
凡兆 一九八 三三五 三三六
本朝文鑑 三六八
本來無一物 三七 三八 六三 七〇

誠 一七 三五 三八 四一 四七 六〇 八〇
一〇六 二四 一三三 一三六 一三九 一五九
一六〇 一六七 一七七 一七九 一九六 一九九
二〇五 二二五 二四二 二四五 二四八 二四九
二六六 二七〇 二七二 二八一 三三六 三四一
三五〇 三五五 三八〇 三八一 三八三 三八六
三八八 三九〇 三九三 三九四 三九七 四〇五
四〇七 四〇九 四一五 四一九 四二二 四二五
四二九
方嗣 三 四三 四四 四五
正名 一六三
正秀 二八二 二四三
昌房 二七六 二八〇
増位山記行 三三〇
まつのなみ 三三三 三三三 三三八
松井和泉 一八〇

萬葉集 三五九 三六五 四〇一—四〇三 四三四
萬海 一三八
萬菊丸 二七七 三〇六
滿吉 五六 二二

三池 九三 二五〇 二五三—二五五 二五六 四七六
三河小町 三四〇
三河屋吉左衛門 一八九
三毛 二五三
水鹿刈 三五六
三十幅 四一七
三千風 三四五 三四六 四三六
通俊 二〇一
虛栗 三九 二四二 二四五—二四七
源頼朝 二五三
義笠 三九
耳廣 三

もとの清火 三三一
物狂 二九 一三九 二〇一 二〇二
物のあはれ 四三五
桃足 三四 二二 三五七 三九八
桃の杖 四二一
盛定 五六 二二
守貞漫稿 一五五
守武 一六九 二二一 二三八

也雲軒 四七 八 二五七
陽成院 一六六
養陽 七五 七七 八三 九〇
八雲御抄 二〇一 四〇二
野徑 三三三
野水 三七
保友 五
康頼 七五

明心居士 二二 二〇〇
宮内四海 二四
妙問堂記 四〇二
宮脇仲策 七五 七七—八一
みよのなみ 四一六
三井寺 四五

無曲軒家集 二〇一
武藏野 四六 二一 四二—四五
武者小路實陰 四一八
無心所著 二八四 二八六
無盡經 二一八
宗通 二 四三 四四 三五五
宗春 一五五 二五六
宗房 二二九 四〇〇
無分別 六八 二二五 二二六 二二八 二二九 二三〇

安井小酒 二二 二二
野童 三三四
築普請 三五六
野坡 一六六 二九九
野梅集 一六 五〇 六〇—六三 六四 六八
二一八 一九九 二二七 二二一 二二六 二五四

ゆずり物 三三九
維摩居士 三四七 三四八 三五三
横田艶士 二二七
與左衛門 二五三 二五〇

六玉川談 三六三
無名庵 三三四
村徑 二七七 一五三 二七〇
名譽むかしの水 一八〇
名人 五六 三六六—三八七
食 二六 二一八 二二二 二二二
木因 二八〇
木節 八六
木仙傳 一八一
木兵 八 四九 一五五 二一六 二二〇—二二二
茂慶 六
もちり 三九 四五 四七 四九 二四二 三七九
三九六

義仲寺 二八一 三二九 三三〇
由平 一四五 四四七 一四八 一七四 三五三
四人法師 二一八
來山 八六 九六—九八 一一一 一二八 一四六
一六五 一七五—一七九 三三四 三四二—三五四
三五六 三七四 三七〇 三七一
老子 六三 七六
老莊 二四〇
落月庵 五〇—五四 五七
落柿舎 三三四
螺舎 二二九
羅大經 三五三
囉々哩 五一 五三 五五 五九 六〇 一四〇
一四三 一五〇 一七二 一七三 三五四 三六〇
三六八 四四二

囉々哩居士五十年懷舊 一一一 二五一

關東 三二七 三三四
 關分 三五〇
 蘭舟 五 三七二
 嵐雪 一三八 一四一 一五〇 一五一 一五五 一五八
 一五九 一六五 二三九 二六七 二九一—二九三
 三〇二
 嵐亭 二三九
 覺動 一六〇 六五六 二二六 一二七 一二九
 一三三 二二一 二三〇 二五四 二五六 二九八
 嵐蘭 二九九 四三三

三五〇 三六四 三七五 三七六 三七九 四〇五
 一四〇七 四一四
 流行の句 四一三 四一四
 柳漆 六
 柳水 一三九
 柳門 三六六
 利休 二四五
 六祖壇經 三八
 李原 一七七 二二三 二六八 二七三 二九九
 利口 四〇四 四一一
 李青蓮 一四三
 李七 三五一
 李太白 三五三
 李天 三五三 三五五
 立圃 二三八
 里鳳 三五二
 涼帝 一〇三 一〇五
 涼苑 二八〇 三五六

今徳 五
 利陽童子 三四九
 林犬 四九 二二六 四三八
 ル
 類柑子 三七三
 レ
 冷泉家 四一六
 歴代滑稽傳 三五三
 連歌新式追加 四二八
 ロ
 露磧 二一九
 露石 三七七
 露川 二七八—二八〇
 露通 一〇三 一〇四 一〇六 一一八 二八一 三〇〇
 三一

芦笛 三二三
 芦文 二八〇 三〇九
 芦屋 八六 八七 一〇七
 論語 一五八
 枉言 四〇一
 和歌三體 一八 一九
 和歌代々の栞 二〇三
 和漢三才圖會 三三 七三
 雙輪 一七六
 鷺雪 一九七

惟然 六八 二七九 三二二 三三四—三三〇 三三三
 一三四四 三四九 三五三 三六四 三六六 三六七
 三七三
 惟中 九 一一 一三 一九 三四 三五 四三九
 四四〇 四三六
 井筒屋庄兵衛 一二九
 井筒屋藤七 二一八
 田舎の句合 一九 二二〇 二四〇
 エ
 恵心 一八九
 越人 二二〇
 慧能 六三
 慧(恵)能録 三六 三七 三九 七〇 一一五
 一三〇 二二九 二三九 二四二 三六〇 三八三
 猿山 三五六

をかし 一四 一六 一七 二八 四五 四九
 二四二 二四四 三三五 三九五 三九六 四〇四
 四〇五 四一一
 小川彦九郎 七九
 小倉三郎 一一三
 小倉次郎 一二二
 小倉の座 一二二
 小野川立吟 二二七 二九三 三七四

著者略歴

昭和九年京都帝國大學文學部國語國文學科卒業
就職——京都府立第三中學校教諭
著書——俳諧の口

昭和十九年五月一日印刷

昭和十九年五月三日發行『鬼貫論』

(200部)

定價 總五圓貳拾錢
特別行爲稅相當額五拾錢
合計金五圓七拾錢

檢

印

著者

山崎喜好

發行者

古田晁
東京都京橋區銀座西六ノ四

印刷者

今井扶
東京都神田區鍛冶町五ノ二
(東京四八四)

配給元

日本出版配給株式會社
東京都神田區淡路町二ノ九

出版會承認

い四三〇四二天

發行所

東京都京橋區銀座西六ノ四
電話東京一六五七六八番
銀座銀座(6)二〇五六番

株式會社

筑摩書房
(會員番號二一七五二七)

985
61

1225-

65



價 . ¥ 5.70 (税込)

終